

稲 成 遺 跡

— 一般国道 42 号（田辺バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

1990年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

稲 成 遺 跡

——一般国道42号（田辺バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

1990年3月

財団法人 和歌山県文化財センター

序 文

昭和63年度、当センターは、建設省所管の一般国道42号（田辺バイパス）関連事業として、田辺市の郊外に所在します稲成遺跡の発掘調査を県教育委員会指導のもとに実施して参りました。

その結果、自然の災害に起因したと考えられる平安時代を中心とした自然流路の痕跡を確認いたしました。流路内には、流されてきた弥生時代中期から平安時代にいたる遺物が多数発見され、上流に今まで明らかにされていなかった集落の存在が推定されるようになりました。また、この地方では、今までほとんど皆無であった木製品が出土し、いっそうの注目を集めました。

平成元年度は、出土した遺物の整理業務を中心に、また本遺跡の性格、周辺遺跡の検討をも含め作業を実施致しました。

本書は、こうした2ヶ年にわたった発掘調査・整理業務の成果をとりまとめ、報告書として刊行するものであります。本書が、当地方の歴史を知るうえで一つの資料となれば幸いかと存じます。

最後になりましたが、本事業にあたり御指導、御支援を賜った諸先生方や紀南工事事務所をはじめ関係機関、地元の方々に對して、改めて厚く御礼申し上げます。

平成2年3月

財団法人和歌山県文化財センター

理事長 仮谷 志 良

例 言

1. 本書は一般国道42号（田辺バイパス）建設にともなう稲成遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は建設省の委託事業として財団法人和歌山県文化財センターが受託し、発掘調査及び出土遺物の整理業務を実施した。
3. 発掘調査および整理業務に要した経費は建設省の負担である。
4. 発掘調査は昭和63年度、整理業務は平成元年度の期間にそれぞれ実施した。
5. 発掘調査および整理業務は、調査委員会・教育庁文化財課の指導のもとに実施した。
6. 調査の組織は次のとおりである。

調査委員会

調査委員 羯磨 正信（和歌山県文化財審議委員会委員）

〃 巽 三郎（〃）

〃 都出比呂志（〃）

〃 藤沢 一夫（〃）

教育庁文化財課

(財)和歌山県文化財センター

課 長 梅村善行（昭和63年度） 事務局長 文化財課長兼務（昭和63年度）

〃 北野全美（平成元年度） 専務理事 鍋島伊津夫（平成元年度）
（事務局長兼務）

副課長 福田資弘（昭和63年度）

〃 堀代喜蔵（平成元年度） 次 長 菅原正明

主 幹 高橋 彬 埋蔵文化財課長 辻林 浩

文化技術班長 吉田宣夫 〃 主査 永光 寛（調査担当）

〃 主任 藤井保夫 管理課長 松田正昭

7. 発掘調査・整理業務は、中林都志が補助した。
8. 出土木製品の保存処理は、財団法人元興寺文化財研究所に委託した。
9. 調査事業遂行にあたっては、田辺市教育委員会をはじめ地元の方々に協力を得た。
10. 本書の作成・編集は、財団法人和歌山県文化財センターが行い、実務を永光寛が担当した。
 - ・挿図中、地図に方位の記載がない場合は、通例に従い地図上方を真北とする。その他の地形図・実測図は磁計方位とする。
 - ・遺構全体図などの実測図中、攪乱坑・調査中の任意の掘り方については原則として毛羽の記入を省略した。
 - ・出土遺物実測図は、土器・木製品（一部縮尺が異なる）を3分の1に縮小、周辺遺跡出土遺物は6分の1に縮小し記載した。
 - ・出土遺物実測図と図版中の遺物写真番号は共通する。
 - ・出土遺物実測図の中で網目を付した遺物は、黒色土器の炭素吸着状況を示す。
 - ・周辺遺跡の出土遺物（第24図）は、田辺市教育委員会保管の遺物を実測し掲載した。

本文目次

第1章 調査の経緯	1
1 確認調査の実施	1
2 発掘調査の実施	1
3 整理業務の実施	1
第2章 環 境	1
1 地理的環境	2
2 歴史的環境	2
第3章 発掘調査	4
1 調査の方法	4
2 調査区の層位	4
3 遺 構	6
(1) 自然流路跡	7
(2) 不明遺構 1～6	7
4 遺 物	10
(1) 自然流路跡の出土遺物	10
ア 上位出土遺物	10
イ 中位出土遺物	12
ウ 下位出土遺物	16
エ 排水坑出土遺物	21
(2) 遺構の出土遺物	21
ア 遺構4出土遺物	22
(3) E区の出土遺物	22
(4) W区の出土遺物	22
第4章 考 察	23
1 遺構の考察	23
2 遺物の考察	23
3 稻成遺跡の出現と周辺遺跡	25
第5章 総 括	26

挿 図 目 次

第1図	稻成遺跡位置図		2	第13図	自然流路中位出土遺物実測図②	...14
第2図	周辺遺跡の分布図		3	第14図	〃 〃 ③	...15
第3図	調査地点		4	第15図	〃 〃 ④	...16
第4図	調査区北壁土層図		5	第16図	自然流路下位出土遺物実測図①	...17
第5図	調査区平面図		6	第17図	〃 〃 ②	...18
第6図	自然流路南端土層図		7	第18図	〃 〃 ③	...19
第7図	自然流路跡実測図		8	第19図	〃 〃 ④	...20
第8図	各遺構実測図		9	第20図	自然流路排水坑出土遺物実測図	...21
第9図	自然流路上位出土遺物実測図①	...10		第21図	遺構4出土遺物実測図	...22
第10図	〃 〃 ②	...11		第22図	E区出土遺物実測図	...22
第11図	〃 〃 ③	...12		第23図	排水作業中の出土遺物実測図	...22
第12図	自然流路中位出土遺物実測図①	...13		第24図	周辺遺跡出土遺物実測図	...24

図 版 目 次

図版 1	1 稻成遺跡遠景（北から）	図版 6	6 自然流路内出土遺物・自然遺物
	2 自然流路中位上面（北東から）	図版 7	自然流路上位出土遺物
図版 2	1 自然流路内謠水状況（北東から）	図版 8	自然流路上位出土遺物
	2 自然流路跡検出状況（北東から）	図版 9	自然流路上位出土遺物
図版 3	1 自然流路跡検出状況（南西から）	図版10	自然流路上・中位出土遺物
	2 自然流路跡と上流側遠景 （南西から）	図版11	自然流路中位出土遺物
図版 4	1 調査区全景（西から）	図版12	自然流路中位出土遺物
	2 自然流路南端土層（北から）	図版13	自然流路中位出土遺物
図版 5	1 遺構1砂岩礫出土状況（南から）	図版14	自然流路中位出土遺物
	2 遺構1（南から）	図版15	自然流路中位出土遺物
	3 遺構2（北から）	図版16	自然流路中位出土遺物
	4 遺構3（南東から）	図版17	自然流路下位出土遺物
	5 遺構4（南から）	図版18	自然流路下位出土遺物
	6 遺構5（左）遺構6（右）	図版19	自然流路下位出土遺物
図版 6	1 自然流路内出土遺物・土師器	図版20	自然流路下位出土遺物
	2 自然流路内出土遺物・土師器	図版21	自然流路下位出土遺物
	3 自然流路内出土遺物・土師器	図版22	自然流路下位・排水坑出土遺物
	4 自然流路内出土遺物・土師器	図版23	排水作業中出土遺物・自然遺物
	5 自然流路内出土遺物・木製品	図版24	自然流路内出土木製品

第1章 調査の経緯

建設省と和歌山県教育委員会は、計画中の一般国道42号（田辺バイパス）の工事（延長約1.1km）に先立ち、昭和61年度から埋蔵文化財の取扱協議を開始した。その結果、田辺市稲成町に所在する周知の遺跡（稲成・稲成Ⅰ遺跡）に対し、道路用地買収を待って遺構・遺物の有無確認、あるいは発掘調査範囲決定のため確認調査を実施することになった。

1 確認調査の実施

昭和62年2月、県教育委員会は遺跡の確認調査（稲成・稲成Ⅰ遺跡）を実施した。稲成Ⅰ遺跡は丘陵部の段々畑で、畑地開墾のため削平が著しく、耕作土から僅かながら6世紀後半の須恵器片、12世紀の青磁小皿のほか近世・近代の陶磁器片が認められた。一方の稲成遺跡は、現流の荒光川に並行し南北に流路をもつ幅約7m、深さ約1.2mを計測する自然流路跡が検出された。流路内からは弥生土器片・土師器片・黒色土器・須恵器片・瓦器などが出土し、折敷状木製品も包含されていた。

以上の調査成果を踏まえて両機関協議の末、稲成遺跡の発掘調査を実施するに至った。

2 発掘調査の実施

（財）和歌山文化財センターは、建設省からの受託事業として、昭和62年7月から9月にかけて、発掘調査を実施した。調査面積は当初約1020m²であったが、調査不可能な地域が含まれていたため、最終的に約920m²に変更した。

発掘調査は、表土層とその下位の土層まで一気に深さ約0.5mまで重機ですき取り、以下の作業は人力による排土作業・遺構検出作業を行った。検出した遺構は、性格不明の遺構と自然流路跡である。それぞれに写真撮影と実測作業を加え、すべての現場作業を終了した。出土した木製品は、（財）元興寺文化財研究所に委託のうえ保存処理を行った。

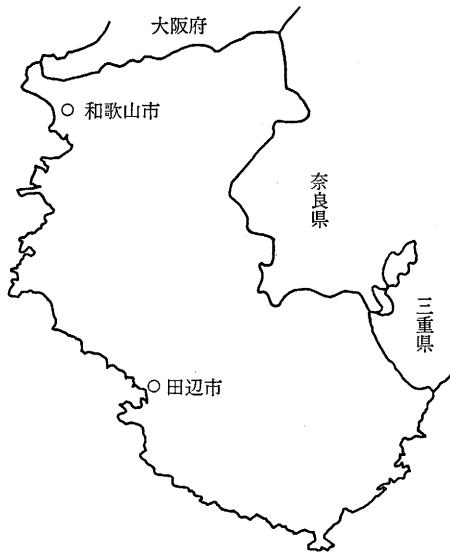
3 整理業務の実施

平成元年度（財）和歌山県文化財センターは、建設省からの受託事業として、前年度の発掘調査資料（写真・実測図・出土遺物）を整理し、報告書の作成の業務を実施した。

整理作業は7月より開始、遺物の洗浄作業・遺物への注記作業・出土土器の接合・復元作業を中心とし、遺物の実測図作成・写真撮影を行い平成2年3月に業務を完了した。

第2章 環 境

本遺跡は、紀伊半島の南部一般に紀南地方と称され、白浜温泉に近く、県下第2の人口を擁する田辺市内に所在する。JR紀勢本線「紀伊田辺」駅より北北西約1.3km（国土座標Ⅵ座標系X＝－255800、Y＝－57500）の地点、標高約5.50mの水田地帯に位置する。



第1図 稲成遺跡位置図

1 地理的環境

田辺市は、県南部に位置し黒潮海流が沿岸近くを流れ、気候温暖にして風光明媚な土地である。田辺を形成する地形は、南が田辺湾に面し、北部から東部に500～700mの山塊が続き、山塊より流れ出る芳養川・会津川によりほぼ骨格が形成される。両河川は広義の意味での田辺湾に流入し、河口部はともに海岸砂丘として発達、その他はリアス式海岸となる。

市の中心部は、2河川のうち流域面積の広い会津川河口に発達した海岸砂丘上に位置する。もともと近世城下町を核として営まれた町で、かつては熊野参詣道中辺路・大辺路街道の分岐点として要衝を占め、現在では近隣市町村を含めた産業経済の中心地となっている。

今回発掘調査の対象となった稲成町は、柑橘類・梅および水田経営などの農業を主体とした地域である。田辺の中心街とは会津川を挟んで対峙し、会津川の支流稲成川とその支流荒光川の流域にひらけるものである。下流域は低地に水田が広がり、標高50m前後の丘陵には畑地が開かれ、丘陵から裾部にかけては集落が営まれている。

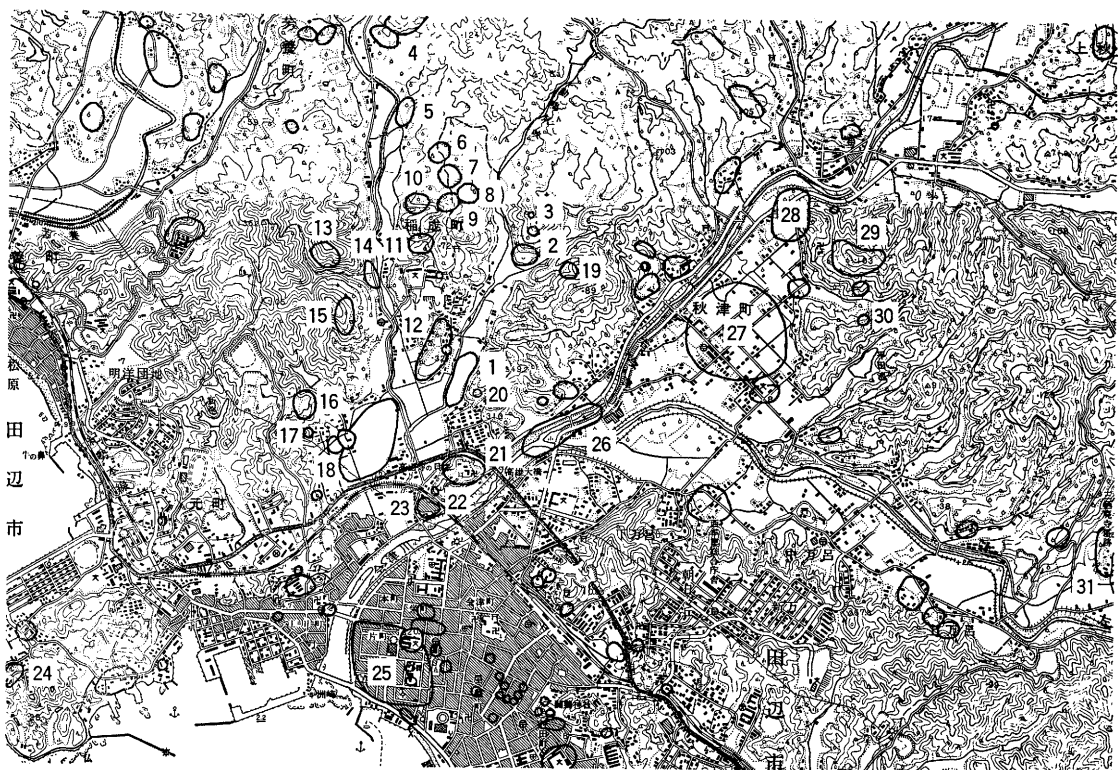
2 歴史的環境 (第2図)

牟婁郡牟婁郷 田辺市以南は、大化前代が今一つ不鮮明であるが、律令時代には紀伊国「牟婁郡」^{注1}と称され、その下に5郷が統括されていたことが知られている。田辺市から三重県の熊野市付近までを疆域とし、紀伊国の南にあって、同国のおよそ半分の面積を占めている。現状は、山地面積が疆域の大半を占め、それに比し平地は河川下流域あるいは海浜部に僅かな面積しか存在しない。故に、水田面積が少なく、人口密度が稀薄であったといえる。

田辺地方は、斉明紀4年条には白浜温泉行幸に関して「牟婁津」^{注2}として、また万葉集巻13には「室の江」^{注3}、平安時代中期の増基法師の熊野道中記ともいえる『いはぬし』^{注4}には、いはしろ（岩代）・みなべ（南部）の浜を過ぎ「むろのみなと」に泊し、水のみ（水呑）にぬけたとある。これらの史料は、明確には比定しがたいとしても、田辺付近が「牟婁郷」と称せられていたことを示唆するものである。

田辺の遺跡 田辺市は、現在のところ213箇所の遺跡を数え、県下では和歌山市・御坊市に次いで多い。遺跡の立地は、左・右会津川が合流する秋津平野と会津川河口の海岸砂丘上に多くみられる。特徴は、弥生時代の遺跡が多く、銅鐸の出土を含め69箇所と県下で最も多い。逆に古墳の数は非常に少なく分布状態が極めて稀薄である。田辺湾岸には、古墳時代の岩陰墓が多く、製塩遺跡などもみられる。

縄文時代の遺跡 この地域にも、古く縄文時代からの遺跡が存在している。会津川の右岸丘陵にある高山寺貝塚（国指定史跡・第2図21）は、すでに昭和13年に発掘調査が行われ純鹹水性の貝類にとともに、^{注6}早期の押型文を施した尖底土器（高山寺式土器）が出土している。



第2図 周辺遺跡の分布図 (縮尺 1:40000)

- 1 稻成遺跡 2 丸橋丘遺跡 3 丸橋丘火葬墓 4 長田遺跡 5 平谷遺跡 6 東江原遺跡 7 中の段遺跡
 8 中の段窯跡 9 東江原窯跡 10 奥江原遺跡 11 奥江原窯跡 12 稻成Ⅰ遺跡 13 坊の谷遺跡 14 天王原遺跡
 15 富山遺跡 16 殿峯遺跡 17 下村古墳 18 北沖代(西沖代)遺跡 19 小屋川瓦窯跡 20 東江原火葬墓
 21 高山寺貝塚 22 糸田古墳 23 糸田遺跡 24 古目良遺跡 25 田辺城跡 26 綾代遺跡 27 八丁田圃遺跡
 28 矢矧遺跡 29 上秋津銅鐸出土地 30 岩倉山銅鐸出土地 31 三栖廃寺

弥生時代の遺跡 弥生時代にはいと、左・右会津川の合流点付近の自然堤防上に八丁田圃遺跡^{注7}(27)が現われる。縄文晩期末の遺物を伴い弥生時代前期新段階の壺などが見られる。田辺周辺部でより遡る遺跡は、白浜町の海岸砂丘に所在する瀬戸遺跡^{注8}(前期中段階)に次いで古い。中期に入ると、海岸部・秋津平野など数箇所に遺跡が進出し、後期末から庄内式期にかけて爆発的に遺跡数が増加する。

古墳時代の遺跡 前・中期古墳の様相が不明瞭であるが、後期には円墳を主とした後期古墳が築造される。牟婁郡44基のうち田辺は17基である。分布は、田辺湾岸の海岸線近くに占地し、内陸部は少ない。分布状況も1基あるいは2～3基が単位となり群集の要素にはなりえない。因みに隣接日高郡の古墳は272基である。しかし、田辺湾一帯には、古墳の副葬品にも比肩しうる遺物が、海蝕洞窟の幅広で奥行き浅い岩棚を利用した岩陰墓にみられる。磯間岩陰遺跡^{注9}(国指定史跡)を代表とし、田辺湾周辺に28箇所の遺跡が確認されている。古墳の概念からややはずれるとしても、副葬品には見るべきものがあり、古墳との関わりの中でその位置付けが注目される。

生産関係の遺跡は、古目良遺跡^{注10}(24)に代表される製塩関係の遺跡が、弥生時代末ごろから出現し、目良式土器B類・A類をへて奈良・平安時代の砲弾形の製塩土器に変遷してゆく。

奈良時代の遺跡 秋津・稻成・三栖地区を中心に、瓦・須恵器窯跡(8・11・19)がみられる。牟婁郡内唯一の奈良時代寺院(三栖廃寺・国指定史跡・31)が、秋津平野に続く三栖地区に所在し、過去数回の調査結果から法隆寺式伽藍配置が想定されている。平安時代後期以降になると宗教的色彩が濃くな

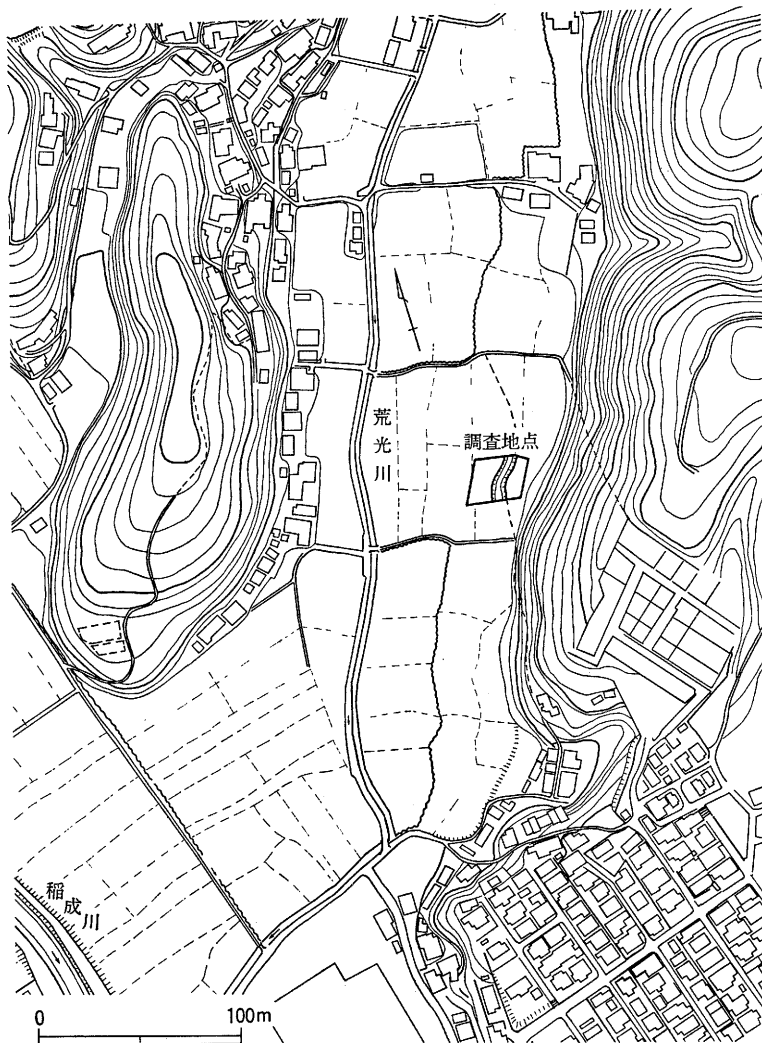
り、末法思想の影響下において、高尾山・仮庵山経塚などが寺院・神社の周辺に経塚が営まれるようになる。このように田辺は、律令時代牟婁郡牟婁郷と称され、郡内唯一の古代寺院がみられるなど、会津川流域の沖積平野を中心とした政治・文化などの中枢の地と解することができる。

第3章 発掘調査

発掘調査対象地は、稲成川と荒光川の合流点から、荒光川に沿って約300m 遡った沖積地である。荒光川の左岸、東西に丘陵がひかえ南北に谷筋が通り、谷幅は約100m ほどである。沖積地は僅かながら河川に沿い南に下降する水田地帯となっている。

1 調査の方法

調査地点（第3図） 調査地点は、谷筋の東端標高約5.5mである。やや変形した方形の調査区は中央部で段差が見られ東と西に分断される。丘陵に近い東側が地表面で約0.5m高い。調査進行上の便宜



第3図 調査地点（縮尺1：5000）

をはかるため東側をE区、西側をW区と呼称する。

調査方法 発掘調査は、確認調査時の成果を参考に表土層（耕作土・床土）を含めE・W区ともに約5.5mの深さまでを重機掘削とした。検出した自然流路跡は、遺物取り上げの便宜を図るため、南北に長い流路を確認調査時の旧第1トレンチを境に北と南に分け、さらに上層から底までを単純に3分割し上位・中位・下位として取り上げた。

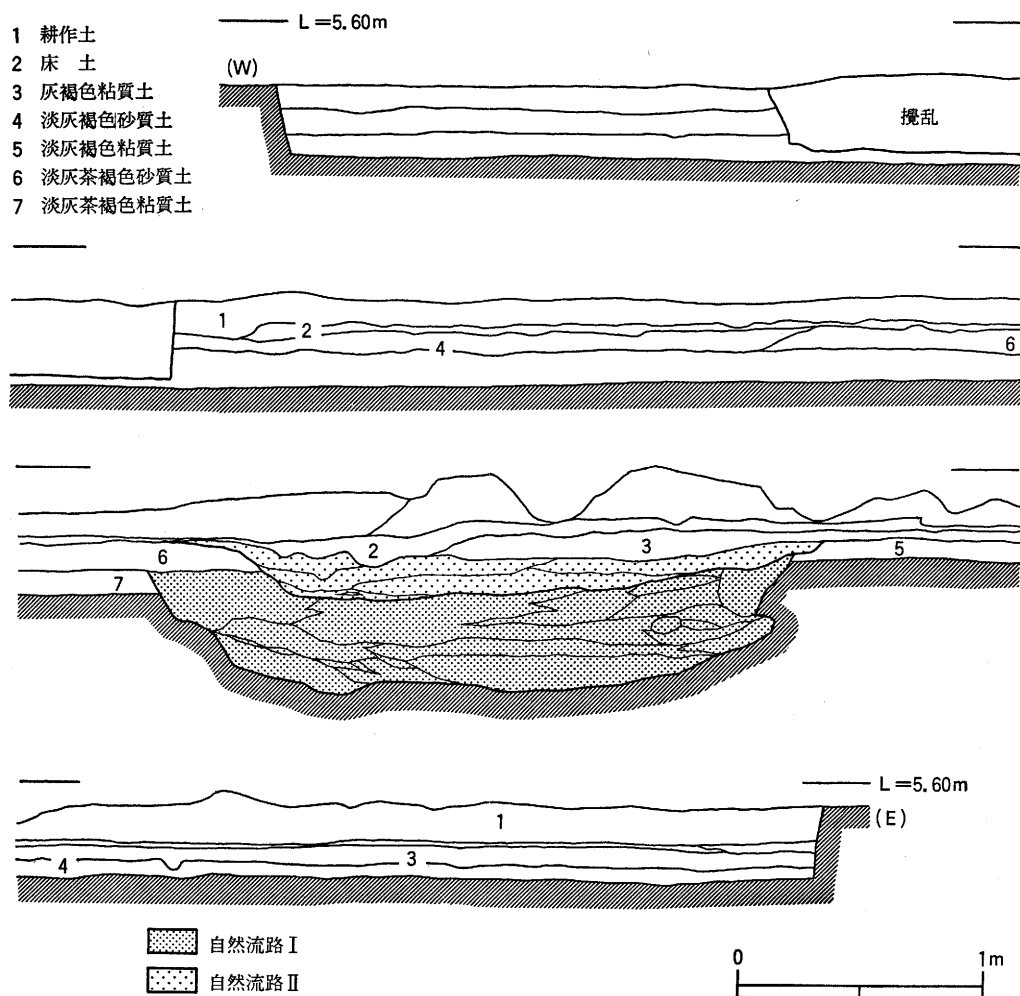
2 調査区の層位

排水坑の掘削 自然流路は、掘り下げが進むにつれ流路を伝う伏流水が湧出、作業に支障をきたしたため自然流路南北端にポンプアップのための排水坑を穿った。以上の点を踏まえ発掘調査を実施した。以下にその成果を順次述べる。

2 調査区の層位

北壁の土層（第4図） 第1層の耕作土はE区が厚く、W区に薄い傾向をもつ、第2層の床土は、W区の途中で途絶える。第3層は、東から西に下降し、自然流路で消滅する。灰色粘質土で瓦器片を包含する。第4層は、W区にのみ堆積する淡灰褐色粘質土である。上層と異なり西方向に若干上昇する。第5層は、自然流路のベースになる。淡灰褐色粘質土で第4層と似ているが本層がやや粘性にまさる。須恵器・土師器の細片混入。第6層は、淡灰茶褐色砂質土で流路ⅠとⅡの間隙を埋める。第7層は、淡灰茶褐色粘質土で、W区においては確認するがE区では第6層を検出したにとどめた。土師器・須恵器の小片が微量ながらも認められる。

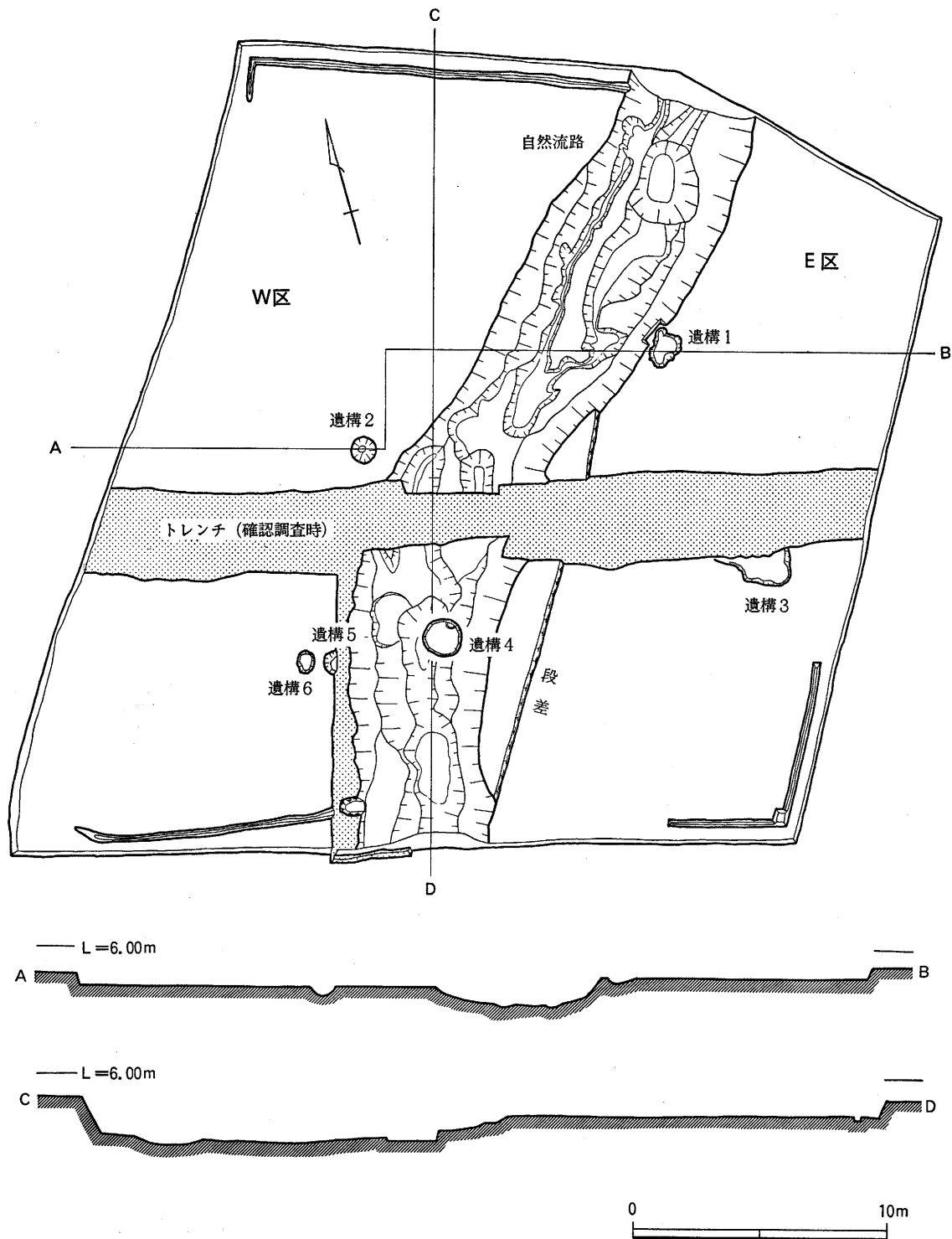
全般的には粘土あるいは粘質土が堆積し、各土層は西あるいは南西に下降、つまり谷の中央に向かい、かつ川下に下降する。E・W区の段差は、北壁断面で観察するかぎり第3層の堆積以降に求められる。南壁断面（第6図）では、段差形成の原因は水田経営とのかかわりが明白である。因みに水田の痕跡は現地表面の1枚が確認される。自然流路の堆積は、簡単に触れると舟底状の断面をもつ流路が大きく2時期に分かれ、第5層の挟り込みをもって流路の開始とし、第3層の堆積期にはその機能を失う。



第4図 調査区北壁土層図

3 遺 構

調査区内で検出した遺構（第5図）は、自然流路跡1条を含め、性格不明の土坑状の遺構6基（以下遺構1～6と称す）である。以下に各遺構の状況を説明する。



第5図 調査区平面図

(1) 自然流路跡 (第6・7図)

調査区中央部を蛇行し南流する。断面は逆台形を呈す。規模は、全長約 30m 以上、幅 5～6m、深さ 1～1.5m である。出土遺物は平安時代の遺物を主に出土する。北壁土層の観察では、土師器・須恵器の小片を包含する第5層がベースになり、瓦器を含む第3層が自然流路の肩部から上層を覆っている。南壁土層でもやはり自然流路の上層を瓦器包含層が覆っている。流路内の堆積層位は、砂・礫・粘土などが流速の強弱により煩雑な堆積を繰り返したことを示す。南北端の土層を比較観察すれば、自然流路の機能した時期は、2期(下層よりⅠ・Ⅱ期と称す)に分けることができる。

第Ⅰ期 最下層から上層までを一応認めることができる。大きくは下層が砂、上層が粘土及び砂質土の堆積である。下層の砂層は下位に粗く上位に細かい傾向をもつ。

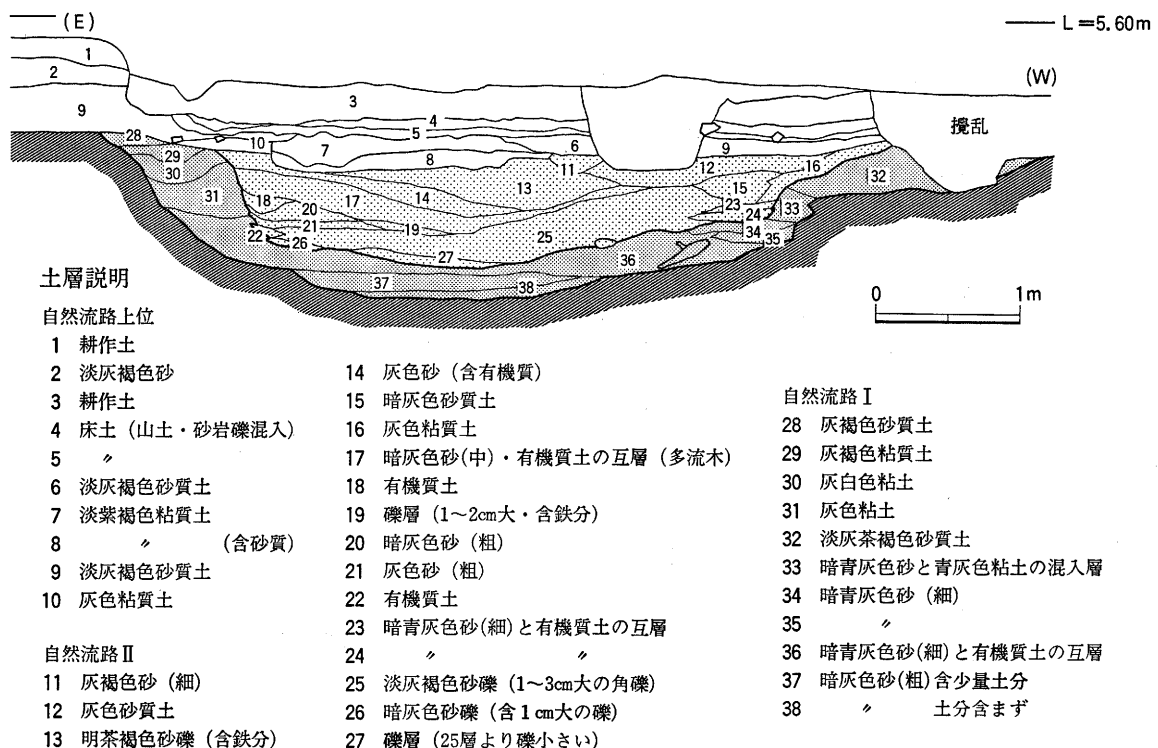
第Ⅱ期 第Ⅰ期より規模は小さく上位に位置する。南壁で幅 4～5m 深さ約 0.8m を測る。下層は、1～3cm 大の角礫と砂の互層で流木・木の葉など有機物が多分に含まれる。

(2) 不明遺構 (第8図)

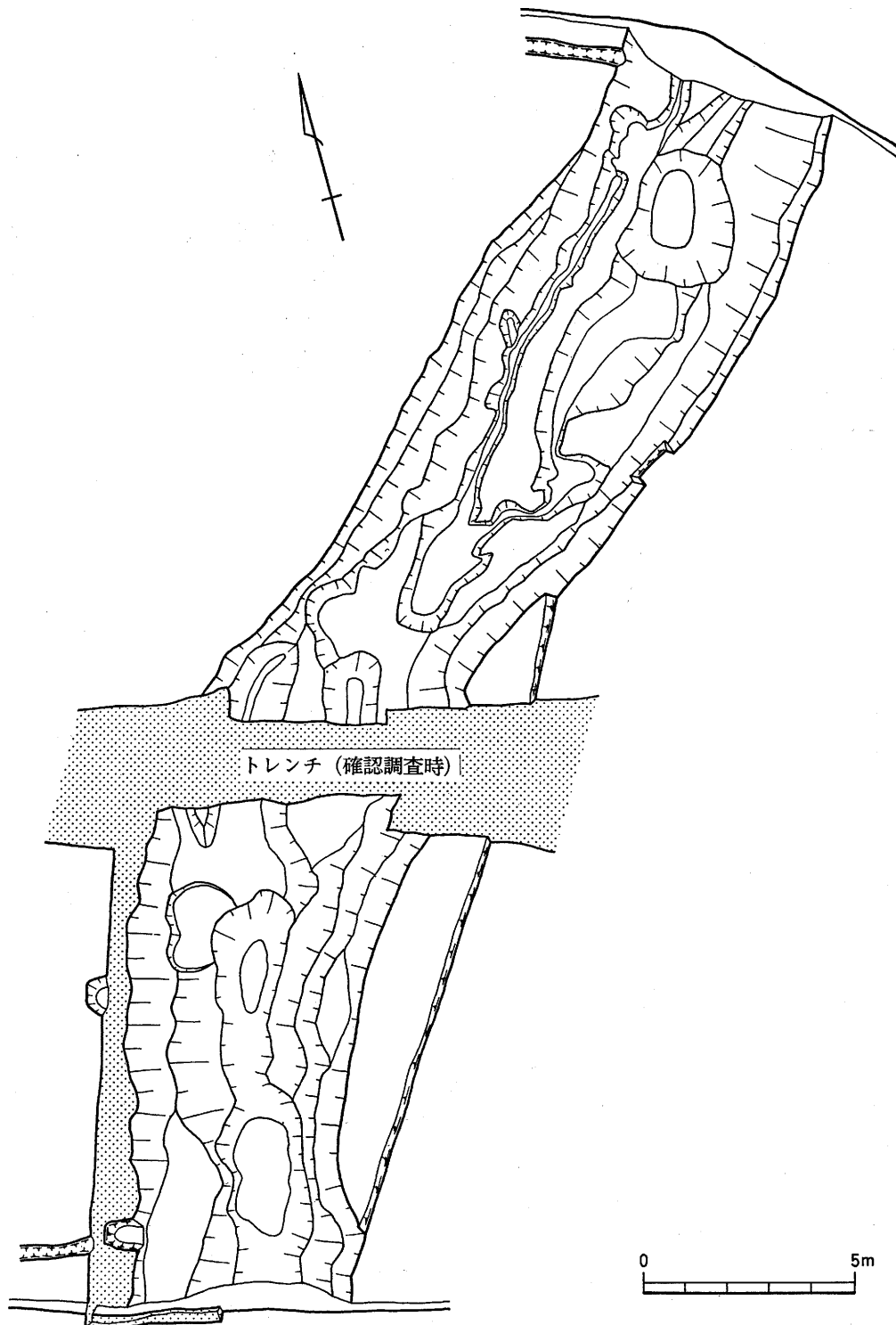
E区に2基、W区に3基と自然流路上面に1基、合計6基を検出した。いずれも時期を決定する遺物は出土していない。

遺構1 (E区) 南北に長軸をもつ不整形の土坑。長軸約 1.55m・短軸約 1.25m・深さ約 0.15m を測る。底よりやや上位に砂岩の角礫が充填され、土師器の細片が出土している。

遺構2 (W区) 径約 1.00m・深さ約 0.40m を測る。底にやや面をもつものの断面はV字状を呈す



・ 第6図 自然流路南端土層図



第7図 自然流路跡平面図

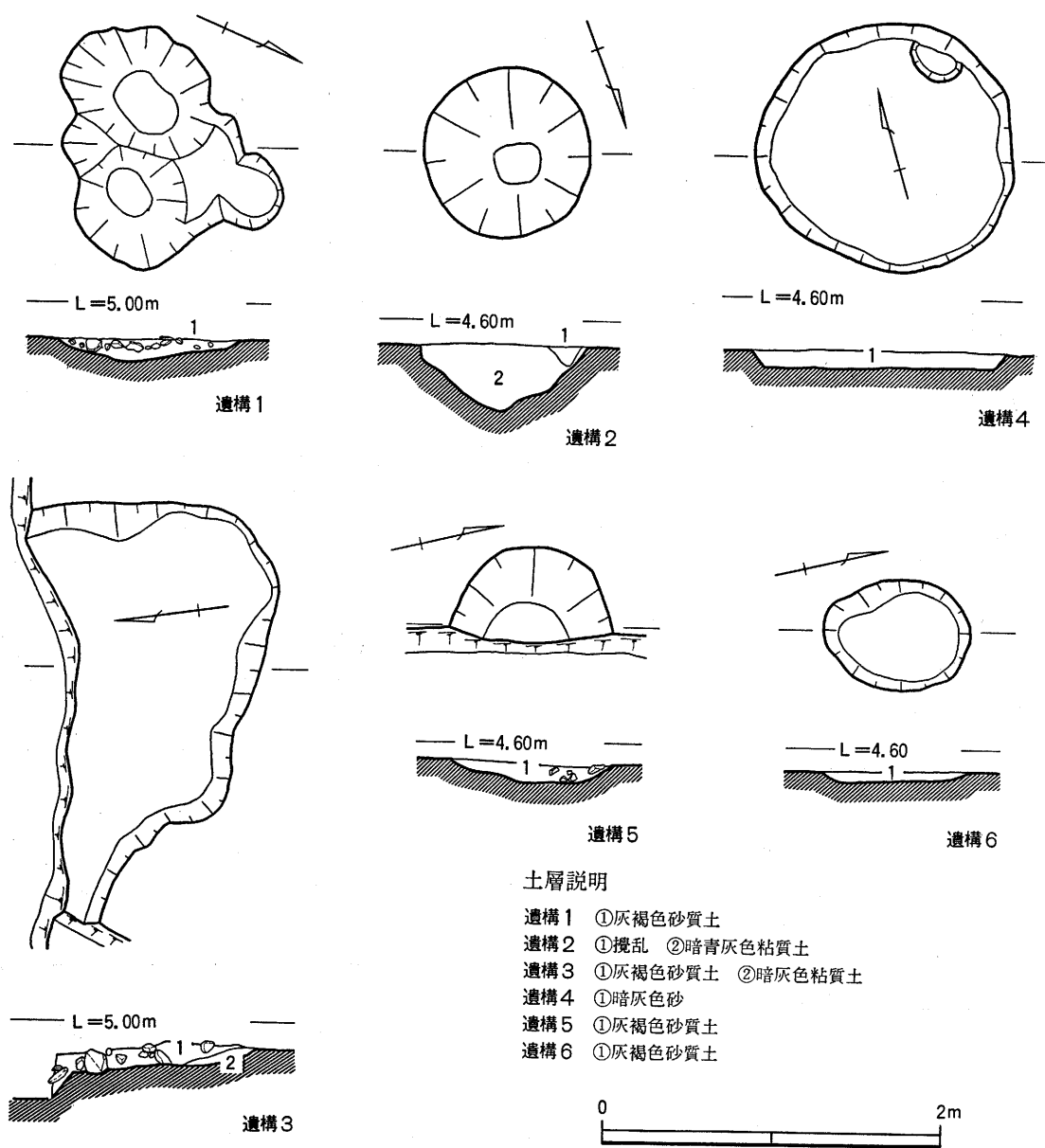
る。葉状の繊維が束ねた状態で出土しているが、取り上げられる状態ではなかった。

遺構 3 (E区) 確認調査時の東西ライトレンチに寸断されているが、ほぼ東西に長軸を持つ不整形の土坑。長軸約2.50m以上・短軸約1.5m以上・深さ約0.15m以上を測る。遺構1と同じく砂岩の角礫が充填されている。

遺構 4 (自然流路上面) 径約1.5m・深さ約0.12mを測る。自然流路埋没後の遺構である。

遺構 5 (W区) 確認調査時の南北ライトレンチに寸断されて半円形に検出。南北約0.96m・深さ約0.12mを測る。若干の砂岩礫がみられる。

遺構 6 (W区) 南北に長軸をもち平面プラン楕円形を呈す。長軸約0.88m・短軸約0.65mm・深さ約0.07mを測る。



第 8 図 各遺構実測図

4 遺 物

遺物の大半が自然流路のもので、E・W区および遺構出土は僅少である。遺物は、弥生時代中期から瓦器・青磁など中世にかかる時点までを含み木製品も出土している。

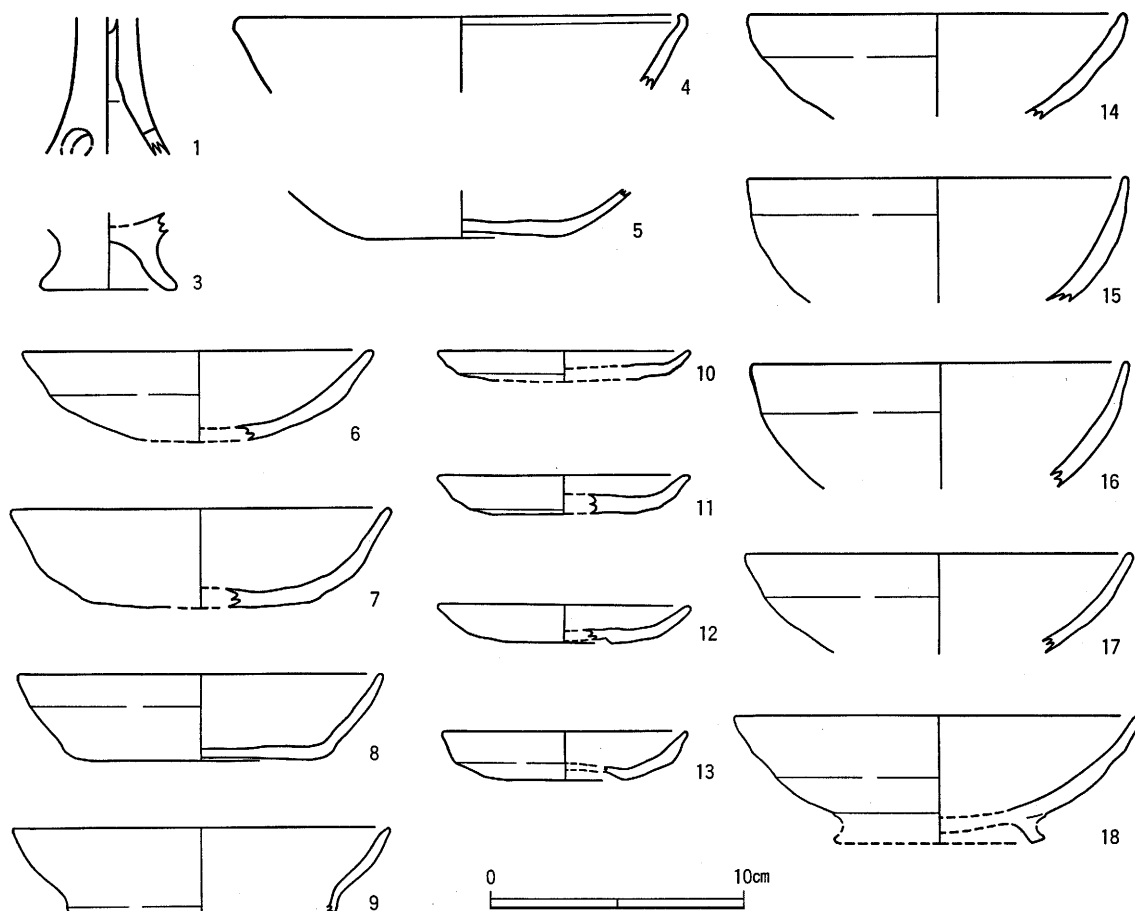
(1) 自然流路跡の出土遺物

調査の方法の項で述べたように上位・中位・下位に分け、かつ排水坑を穿った時の遺物も併せて報告する。上位・中位は、堆積層からすればおよそ第Ⅱ期に当たり、下位は、第Ⅰ期を主とする。遺物の種類は、弥生土器・土師器・黒色土器・須恵器・製塩土器・木製品などである。

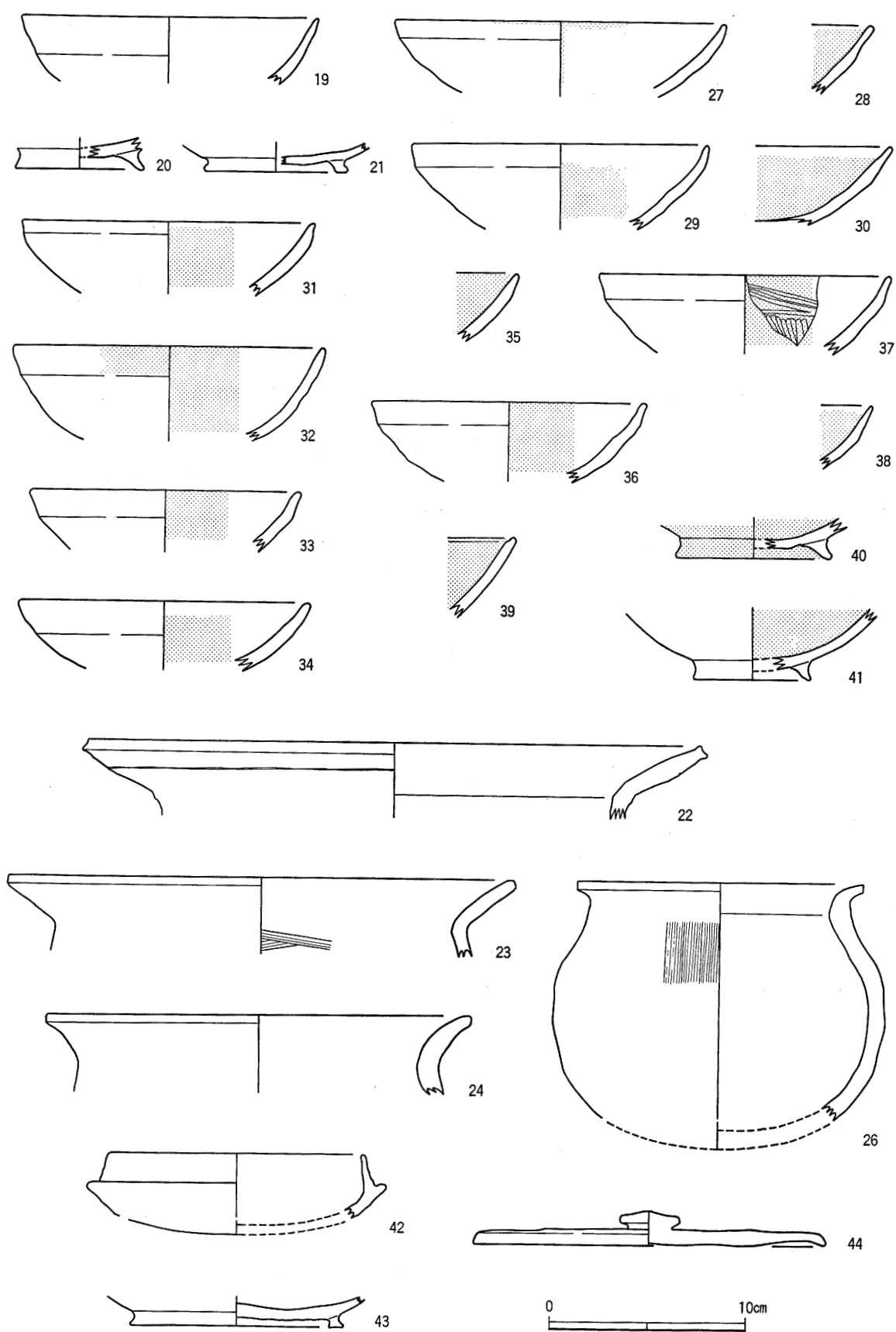
(ア) 上位出土遺物 (第9～11図)

弥生土器 (1～3) 高杯 (1) と台部 (3) などがみられる。摩耗・剝離が著しい。

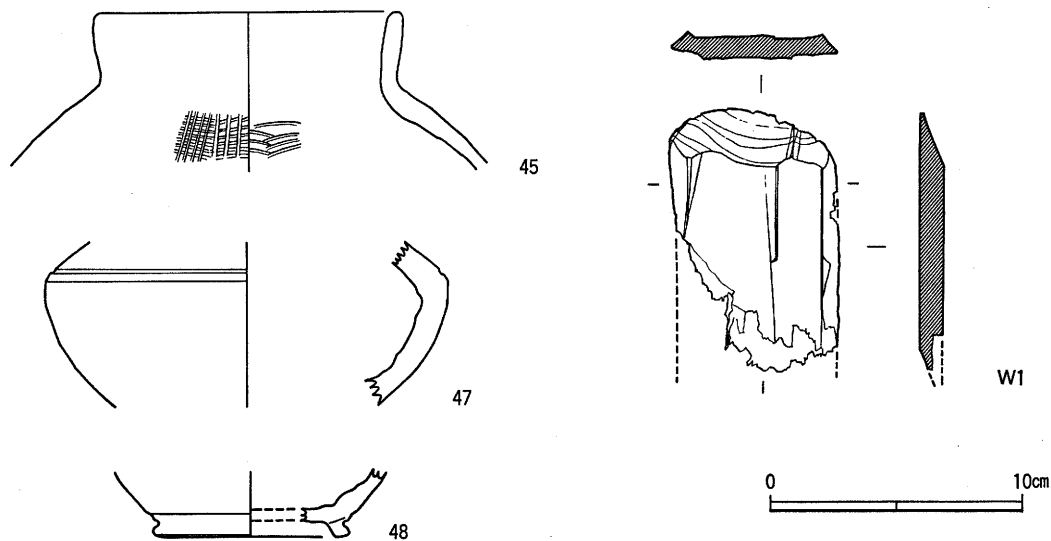
土師器 (4～26) 杯 (4～9) ・皿 (10～13) ・碗 (14～21) ・甕 (22～26) などがある。杯は、口縁端部に沈線をもつ4と、丸くおさめる6～9がある。体部は底部から直線的に外上方に立ち上がる8と、内湾気味に立ち上がる7・9がある。度部は丸底風6と、平底7～9がみられる。皿は9～10cmの径をもち、口縁部内外を横ナデ調整。12は底部に粘土の継目痕が残る。碗は内面が不定方向のナデ調



第9図 自然流路上位出土遺物実測図①



第10図 自然流路上位出土遺物実測図②



第11図 自然流路上位出土遺物実測図③

整、内面口縁部から外面にかけては横ナデ調整を施す。19は体部外面が指押さへの痕跡が顕著。高台は断面が逆三角形20と、台形状21がある。甕は長胴形（22～24）と球形（26）がある。26は口縁部内面にまでススが付着する。24は胎土に結晶片岩を含む。

黒色土器（27～41） 器壁内面に炭素を吸着する A 類の 碗のみである。口縁部外面を篋磨きする 27～29・31と横ナデ調整する 32～38がある。体部外面はナデのあと篋ミガキを施すもの 28・30・37と横ナデのみでおえる 33～35がある。39は口縁端部内面が沈線状に凹む。内面はナデのあと横方向の粗雑な篋ミガキと下半部に縦方向の篋ミガキを施すもの、板状工具によるナデのみにおわるものがある。

須恵器（42～48） 杯身（42・43）・杯蓋（44）・甕（45）・壺（47・48）などがある。

丸瓦（49） 凸面は篋ミガキ、凹面は布目痕をもち須恵質である。

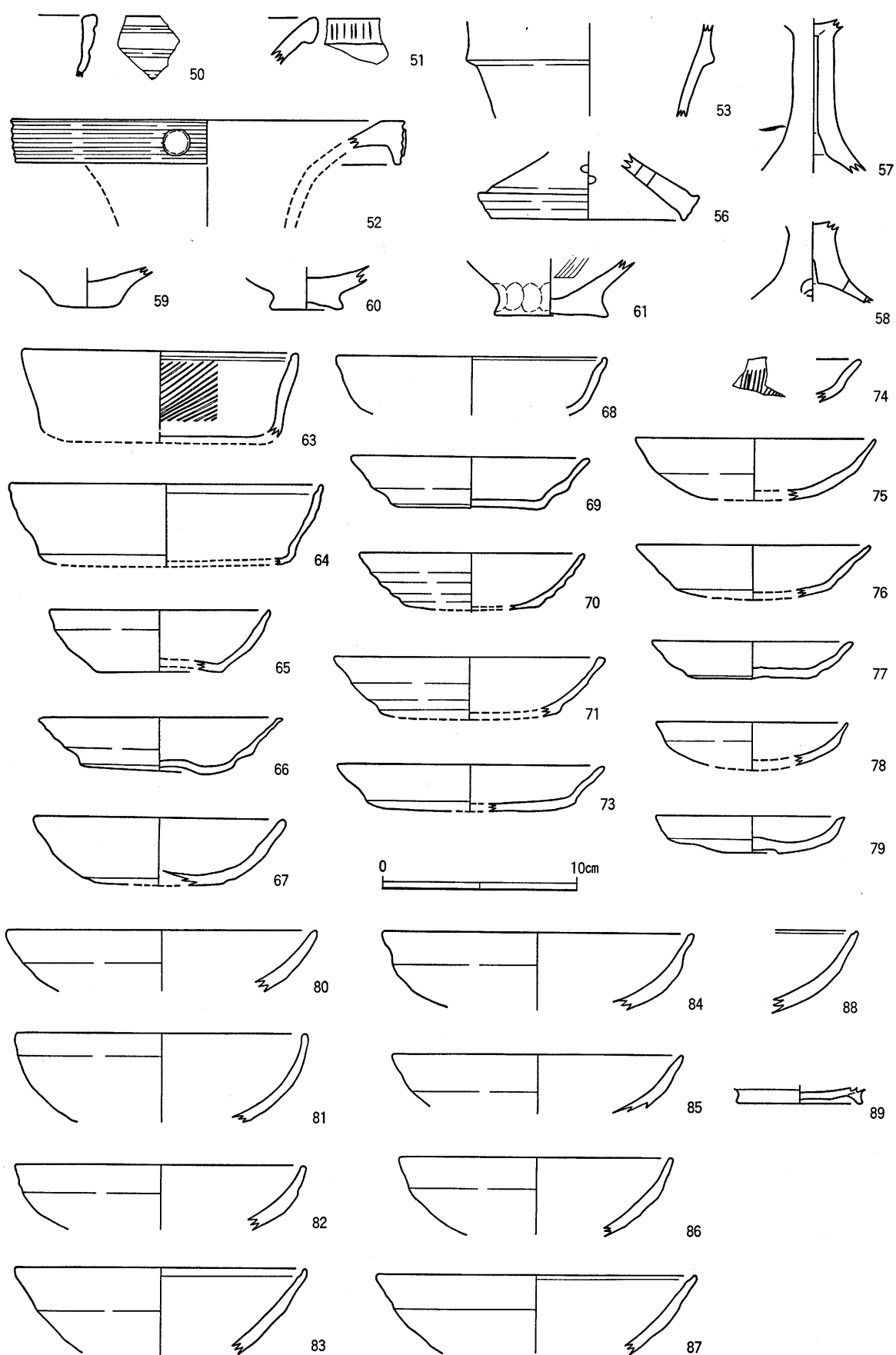
木製品（W1） 短冊型の板状木製品。長さ 10.5cm 以上・幅 6.5cm 以上・厚さ約 1.0cm。先端は U 字状を呈し、年輪に直交してケズリ痕がみられる。

（イ） 中位出土遺物（第12～15図）

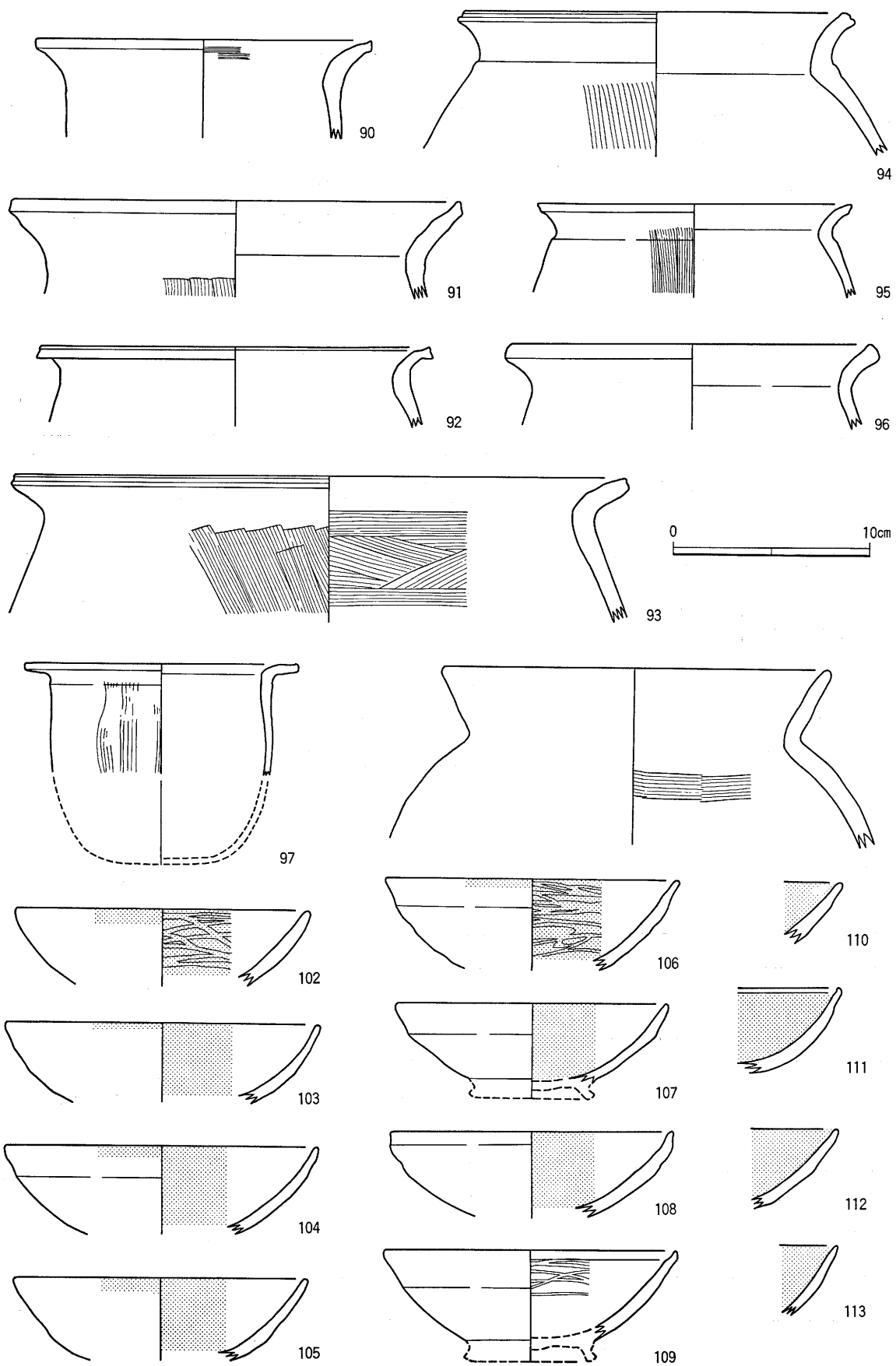
弥生土器（50～62） 壺（50～55）・高杯（56～58）・底部（59～62）など。壺は口縁部に凹線文を施す 50、あるいは垂下部に貼付文（52）がみられる。細片に櫛描直線文の認められるものがある。

土師器（63～101） 杯（63～72・75・76）・皿（73・77～79）・碗（80～89）・甕（90～101）などがある。杯と皿は、径口指数 20 で境界をもった。すなわち指数 20 を越えるものを杯とした。63 は口縁端部内面に浅い沈線と放射状の暗文を施す。多段横ナデ技法の明瞭なもの（70）、不明瞭なもの（71）が多い。段がより不明瞭な 69・73 などがある。66・69 には結晶片岩が胎土に含まれる。皿は底部にナデ調整を施す 77・78 と無調整のままの 79 がみられる。碗は、内外面ともにナデ調整を施すものが大半であるが、83 は緻密な横方向に篋ミガキ。篋はすべて口縁部の内外面を横ナデによって調整し、口縁端部は面をもち上方（90・91・96）、上下（92・94）に拡張するものと、丸くおさめる 98 がある。体部は球形に近い形態 92～96・98 と、直立する形態 90・97 に分かれる。94・95 は体部から口縁部に移行する部分の外面はナデによる段差が生じる。

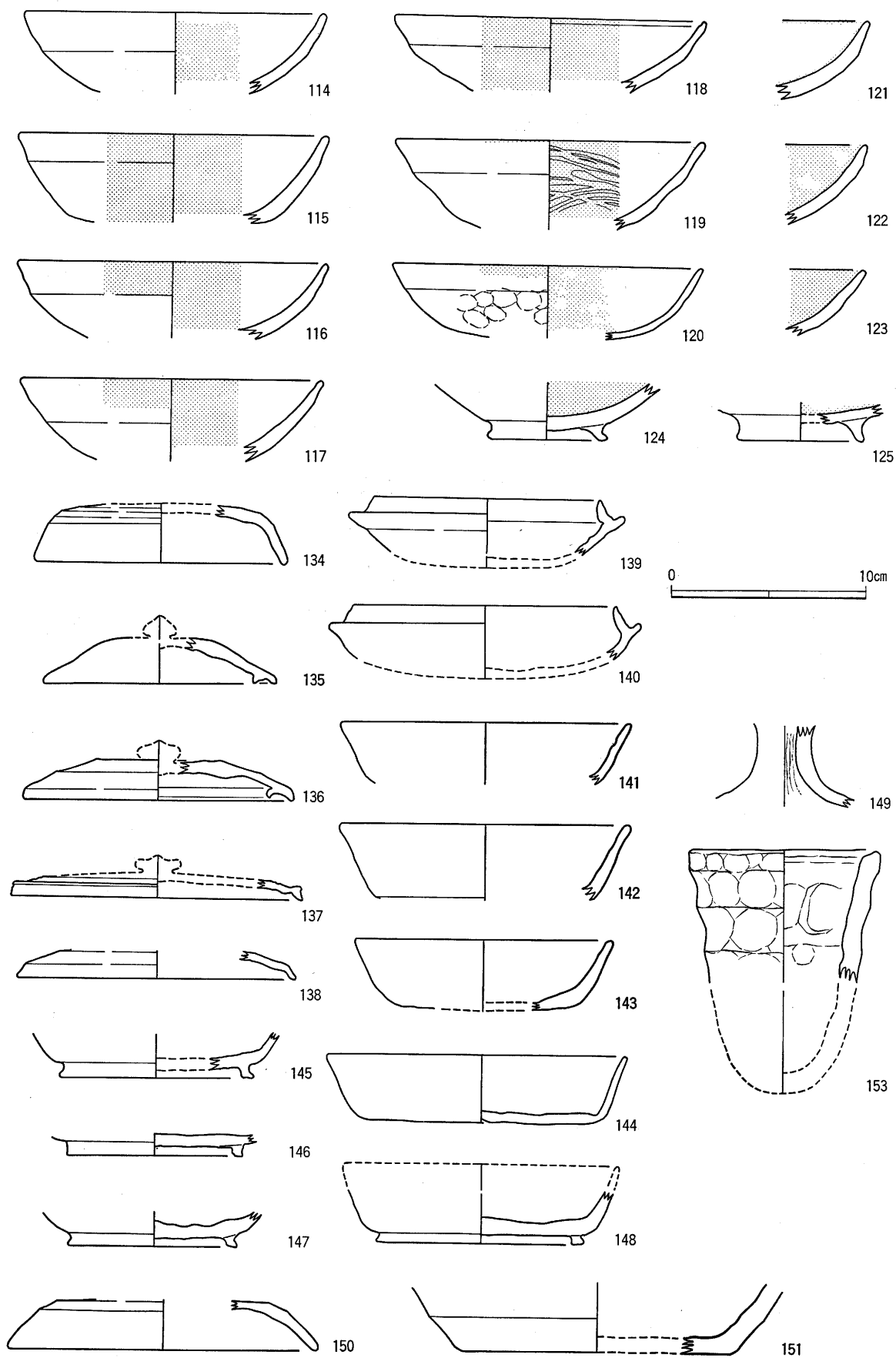
黒色土器（102～133） 碗のみである。口縁部外面付近は篋ミガキを施す 102・104・105・111・112・



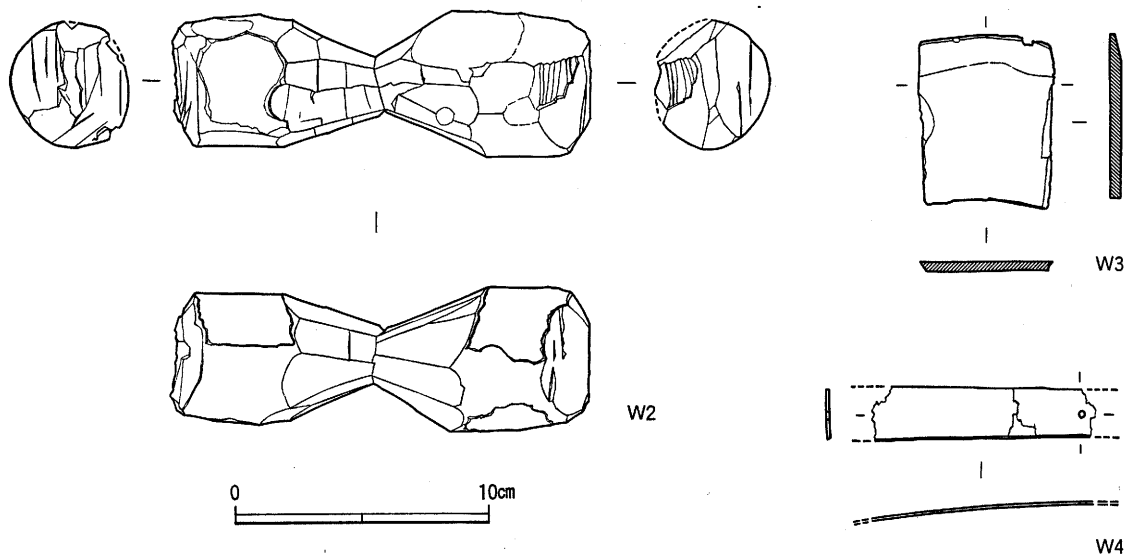
第12図 自然流路中位出土遺物実測図①



第13图 自然流路中位出土遺物実測図②



第14图 自然流路中位出土遗物实测图③



第15図 自然流路中位出土遺物実測図④

113と、横ナデのものがある。体部外面も篋ミガキを認めるもの（102～106・109・110・124）が多く、その他はナデ調整、120は指頭圧痕が顕著で、115も僅かながらみとめられる。内面はナデのみにおわるものと、粗雑な篋ミガキを施す 102～113・124 がある。高台は上位出土のものと同様断面が逆三角形と台形状がある。

須恵器（134～151） 杯蓋（134～138）・杯身（139～148）・高杯（149）・蓋（150）・甕（151）などがある。

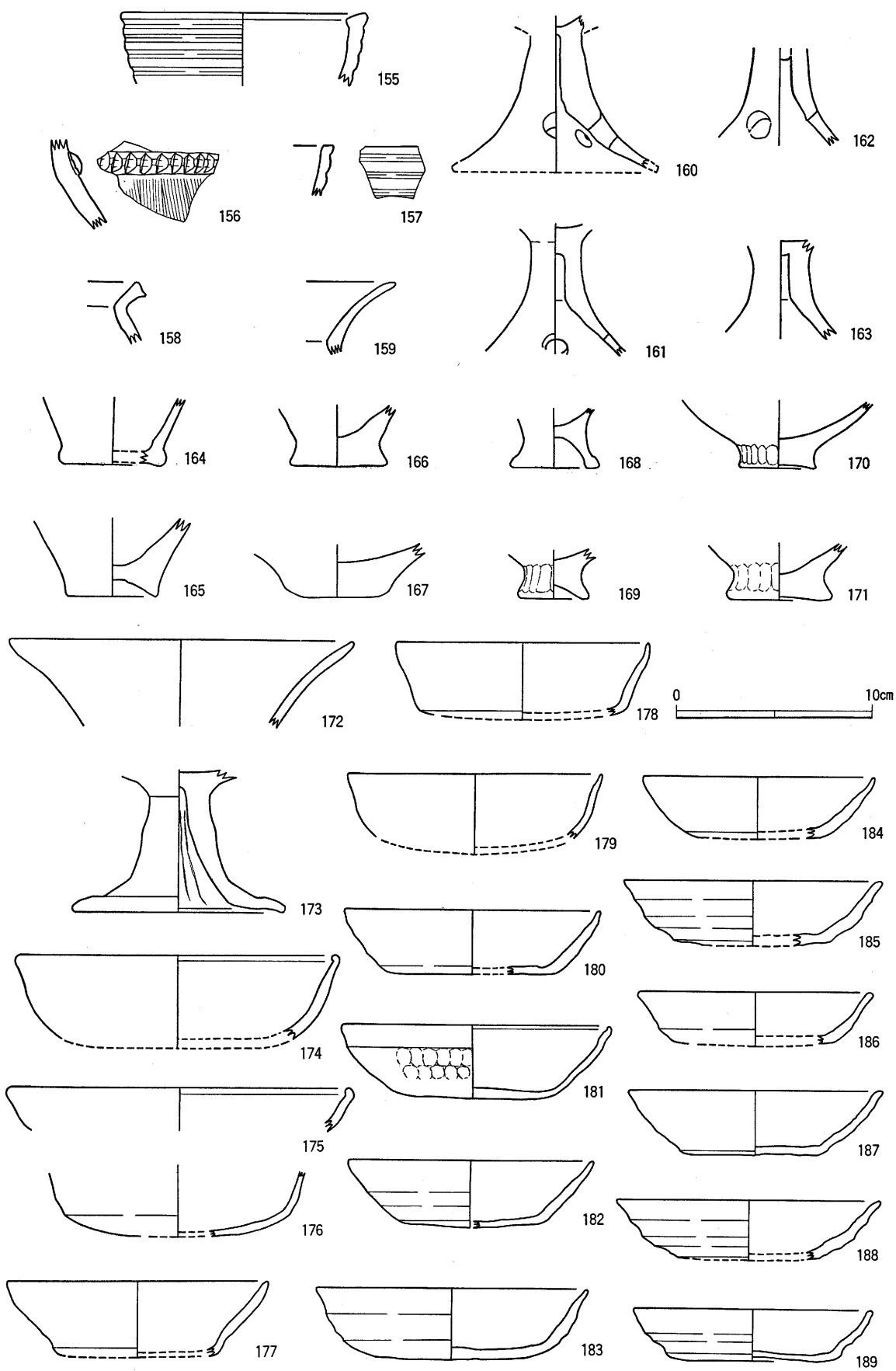
製塩土器（152～154） すべて丸底の砲弾形をなす。器壁は厚く外面指押さえの痕跡が顕著である。

木製品（W2～W4） 木錘（W2）。長さ約16.6cm・径5.7cm（2.3cm）。丸木材の両端に丸面を残し中央に向かって両方から円錐形状に削り込む。丸木面には樹皮が残る。両端面は粗く削り、心部は最後まで削らずに折る。短冊型板状木製品（W3）長さ約6.9cm・幅約5.3cm・厚さ約0.45cm。正目。両端ともに同一方向の弧状を呈す。一面には時取り状の削りを施す。曲物剝板（W4）長さ約8.9cm以上・幅約2.1cm・厚さ約0.12cm。正目。両端欠損。幅中央に不整円形の孔あり、木釘の痕跡と考えられる。

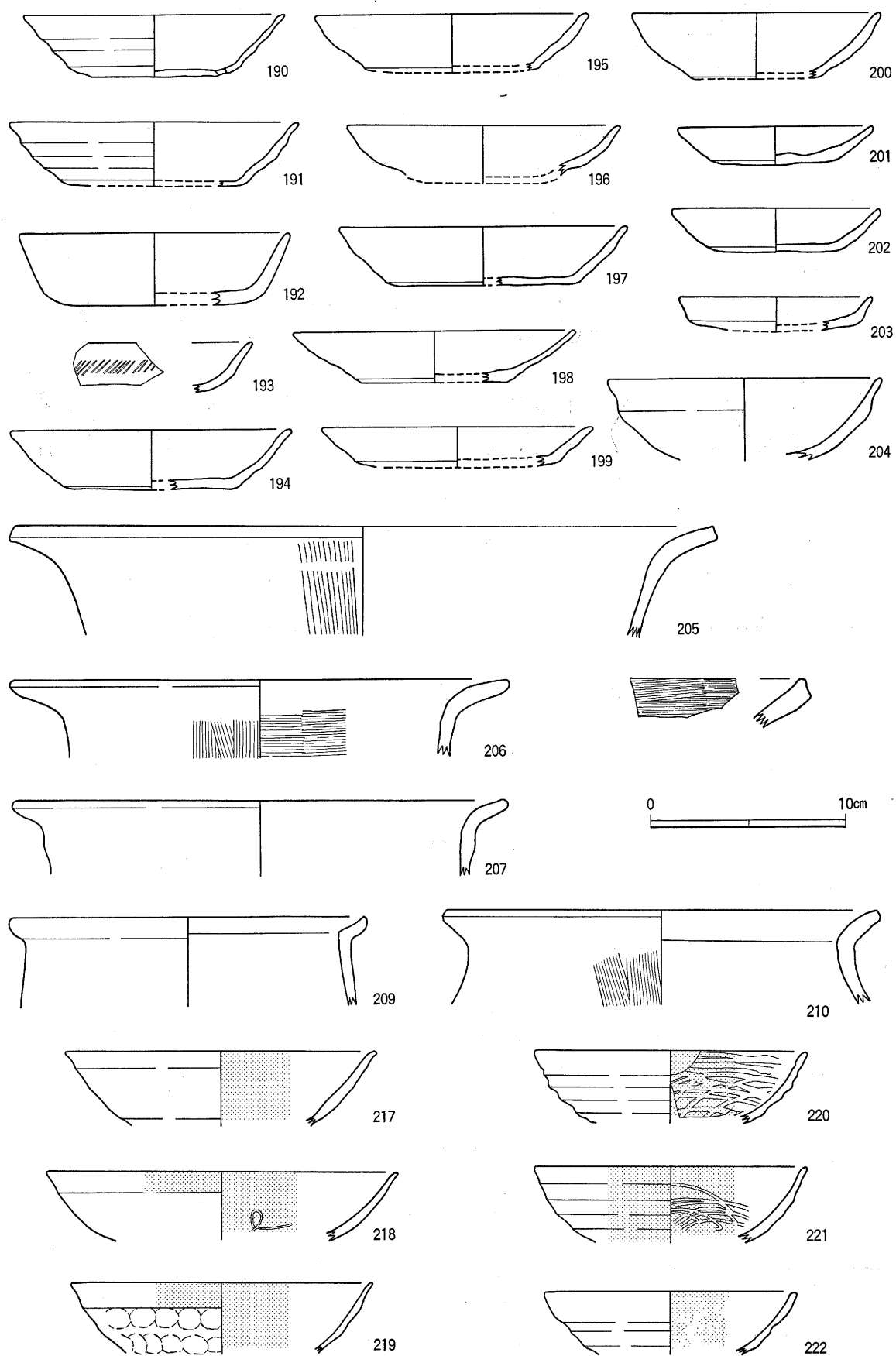
（ウ） 下位出土遺物（第16～19図）

弥生土器（155～171） 壺（155～157）・甕（158～159）・高杯（160～163）・底部（164～171）などが出土している。壺は凹線文を施す155・157と、頸部凸帯に刻目をもつ156がある。

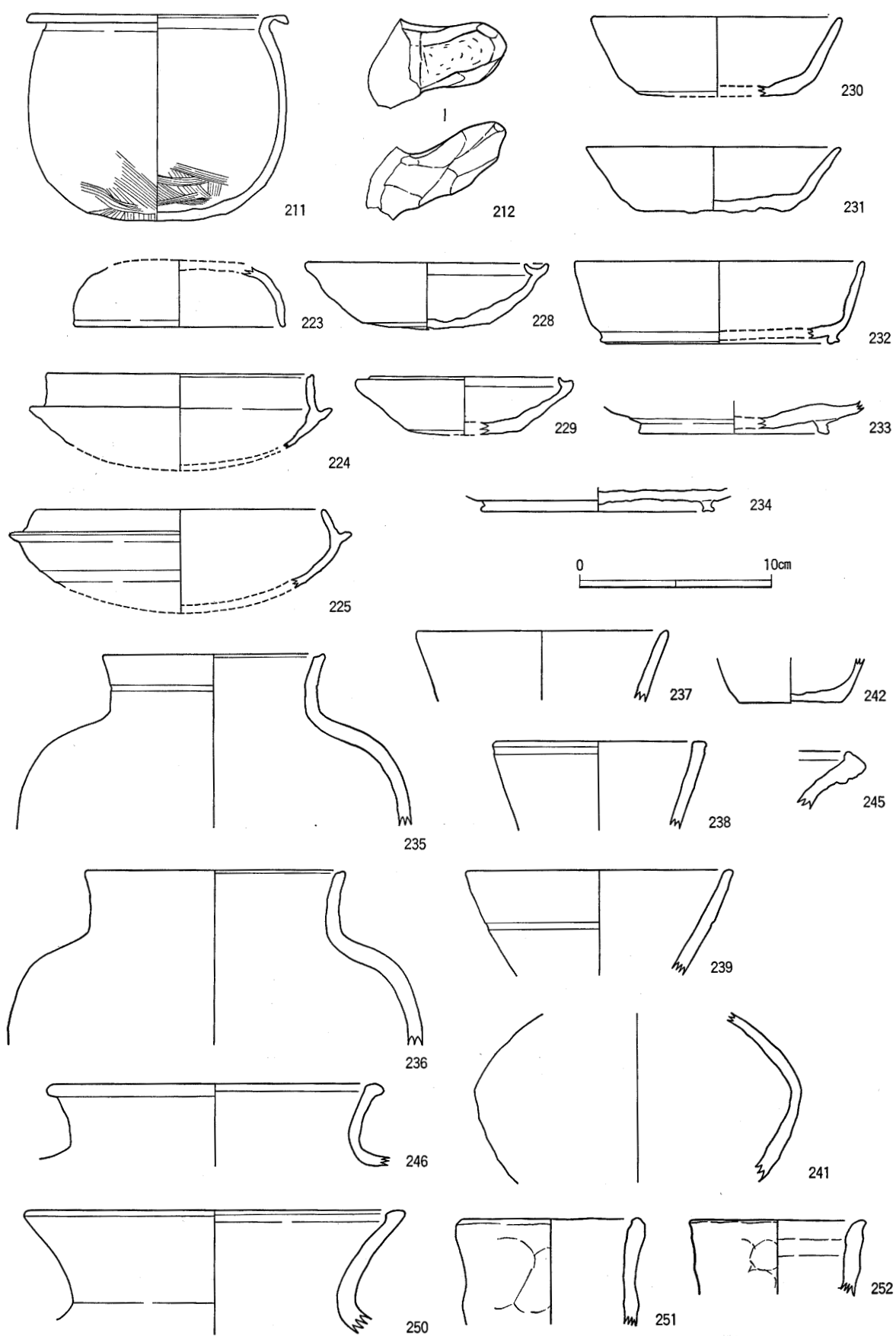
土師器（172～212） 高杯（172・173）・杯（174～192）・皿（193～200）・小皿（201～203）・碗（204）・甕（205～211）・把手（212）などが見られる。杯は、174～176を除き外傾度の強い口縁部が直線的もしくはやや内湾しながら伸びる。体部外面は、横ナデによる段が顕著な 185・188～191 と、段が不明瞭な182・183、より不明瞭な 177～180に分かれる。181は指押さえの痕跡が認められる。底部は無調整が多い。174・175は口縁端部を内側に巻き込む。190は見込部に径0.5cmの穿孔が施される。甕は口縁部が体部から大きく外反し長胴形の体部をもつ、口縁端部は丸くおさめるものと、面をもちかつ上方に拡張するものがある。一方球形の体部に短い口縁部が外反し端部に面をものものもある。ススの付着が顕著である。207・209～211は結晶片岩を含む。



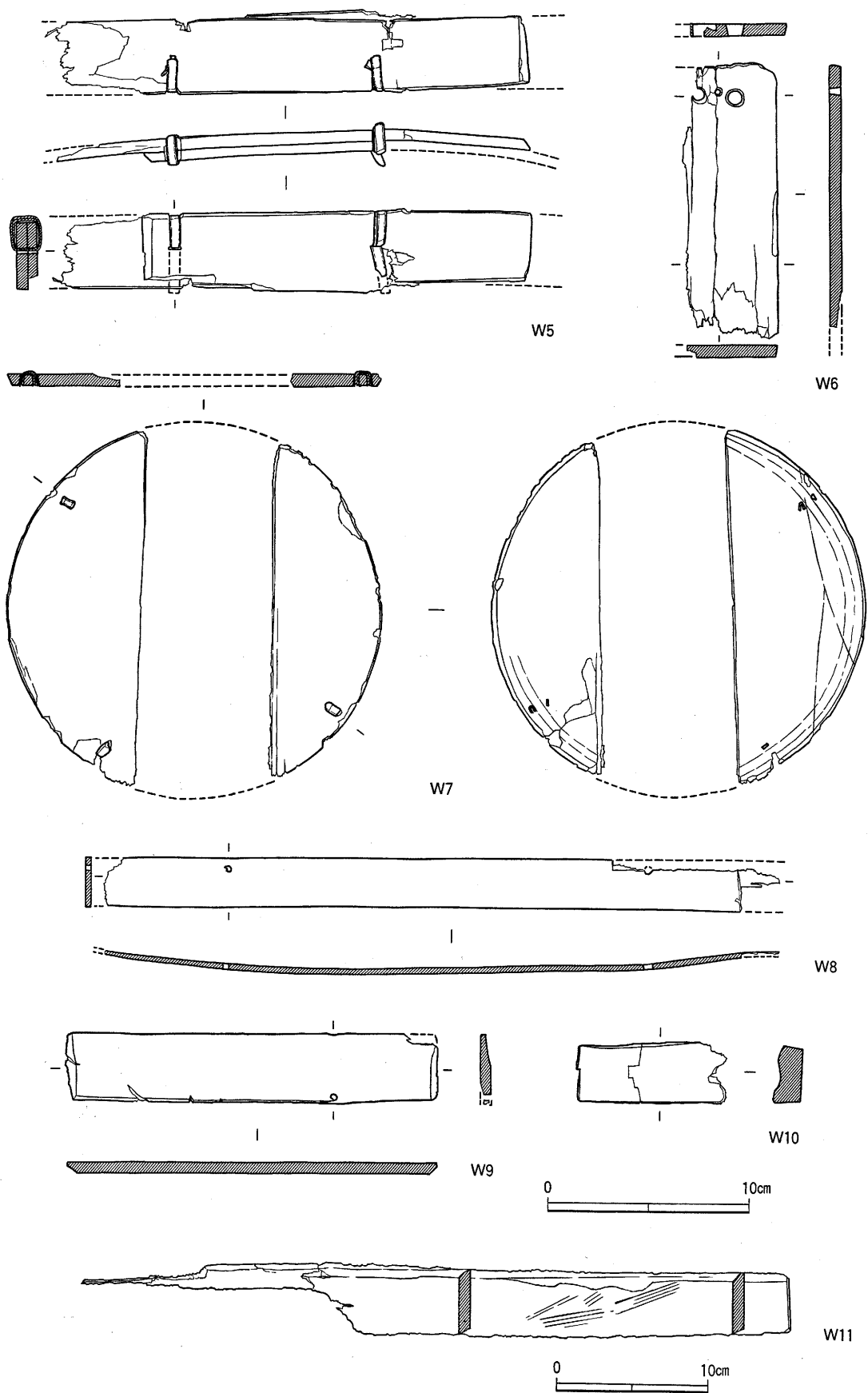
第16图 自然流路下位出土遺物実測図①



第17図 自然流路下位出土遺物実測図②



第18図 自然流路下位出土遺物実測図③



第19図 自然流路下位出土遺物実測図④

黒色土器 (213～222) 碗のみである。A類が多いが、外面まで炭素を吸着させたB類も希にみられる。口縁部外面は篋ミガキと横ナデの調整がみられ、篋ミガキを施す 217 は体部外面を篋ケズリする。217～219 は内面を細くて密な横方向の篋ミガキを施す。218 はループ状の暗文がみられる。219 は体部外面指押さえの痕跡が顕著。220・221 は体部外面がナデによる強い段、222 は不明瞭な段がみられる。

須恵器 (223～250) 蓋 (223) ・杯身 (224～234) ・壺 (235～242) ・平瓶 (243) ・甕 (244～250) などがみられる。

製塩土器 (251～254) すべて筒状の体部をもち指押さえの痕跡が顕著で砲弾形をなす。

管状土錘 (255)

木製品 (W5～W11) 曲物側板 (W5)。長さ 23.5cm 以上・幅約 3.7cm・厚さ約 0.5cm。板目板を使用両端を樺皮で結合する。板状木製品 (W6)。正目板。長さ 13.7cm 以上・幅 4.6cm 以上・厚さ約 0.6cm。一端は鋸状工具で切断、肩部をつくりだすように側面小口を斜めにきる。径約 0.7cm の大孔とその 2 孔間に径 0.3cm の小孔を穿つ。曲物蓋板 (W7)。中央部が欠損。径 17.7cm 以上 (推定径約 18.5cm)・厚さ約 0.6cm。内面に側板の圧痕がみられる。4 箇所側板との結合痕跡が残り、そのうち 3 箇所に樺紐が遺存。内面縁部に側板位置を決める針描きの線刻が巡る。樺皮結合曲物^{注12}B に属する。そのほかに曲物剝板 (W8) と考えられるもの、板状木製品 (W9～10) などがある。

(エ) 排水坑出土遺物 (第20図)

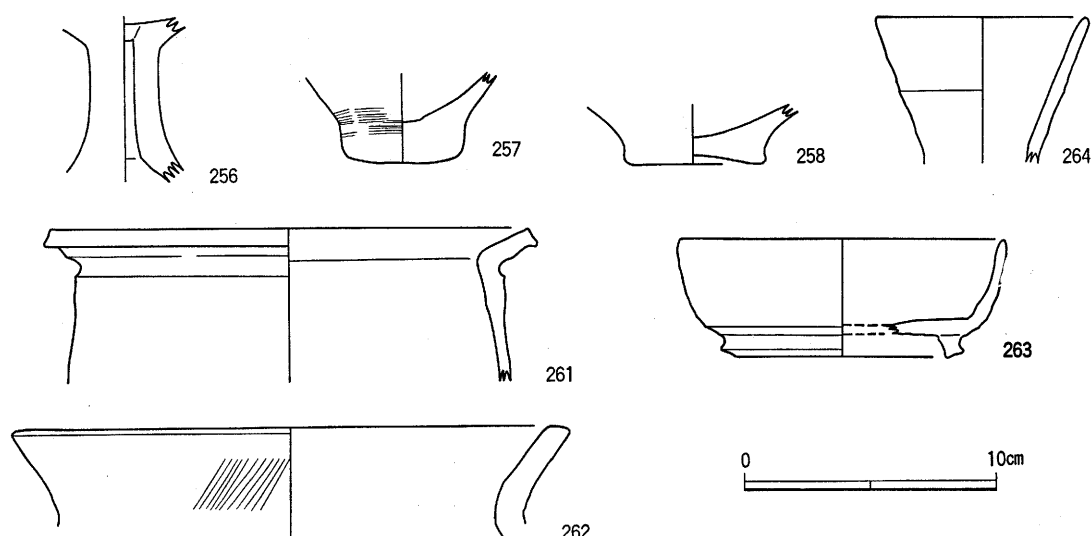
弥生土器 (256～258) 高杯 (256) ・底部 (257・258) などがある。剝離・摩耗が著しい。

土師器 (259～262) 甕のみである。261 は口縁部が体部より大きく外反し、体部外面は篋ケズリのあとナデ調整を施す。胎土に結晶片岩を混入する。

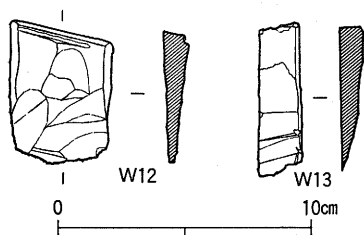
須恵器 (263・264) 杯 (263) ・壺 (264) がある。

(2) 遺構の出土遺物

遺構 6 基の中での出土遺物は遺構 1 と、4 のみである。遺構 1 は土師器の細片、遺構 4 は木製品であ



第20図 自然流路排水坑出土遺物実測図



るが、ともに固有の遺物とは考えられない。

(ア) 遺構出土遺物 (第21図)

木製品 (W12・13) 断面楔形を呈す。長さ5.7cm・幅約4.1cm・最大厚さ1.0cm (W12)。長さ6.1cm・幅約1.2cm・最大厚さ0.95cm (W13)。2点とも基部は鋸状の工具で切断、先端を削りだす。

第21図 遺構4出土遺物実測図

(3) E区の出土遺物 (第22図)

重機掘削中の出土遺物である。北壁土層 (第4図) では第3層にあたる。

須恵器 捏鉢 (266) 東播系の捏鉢である。内外面ともに横ナデ調整が施される。重ね焼きの痕跡が認められる。

瓦 器 (267) 内面と口縁部外面に密な篭ミガキが施され器壁は薄い。

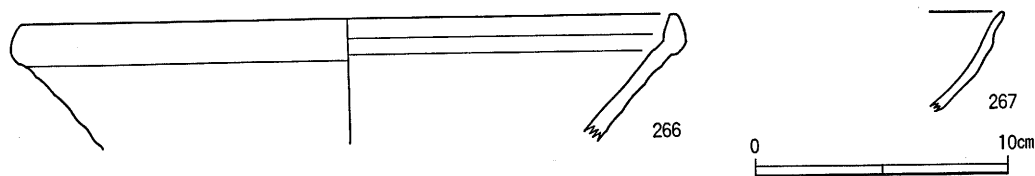
(4) W区の出土遺物 (第23図)

重機掘削中の出土遺物である。北壁土層 (第4図) では第4層にあたる。

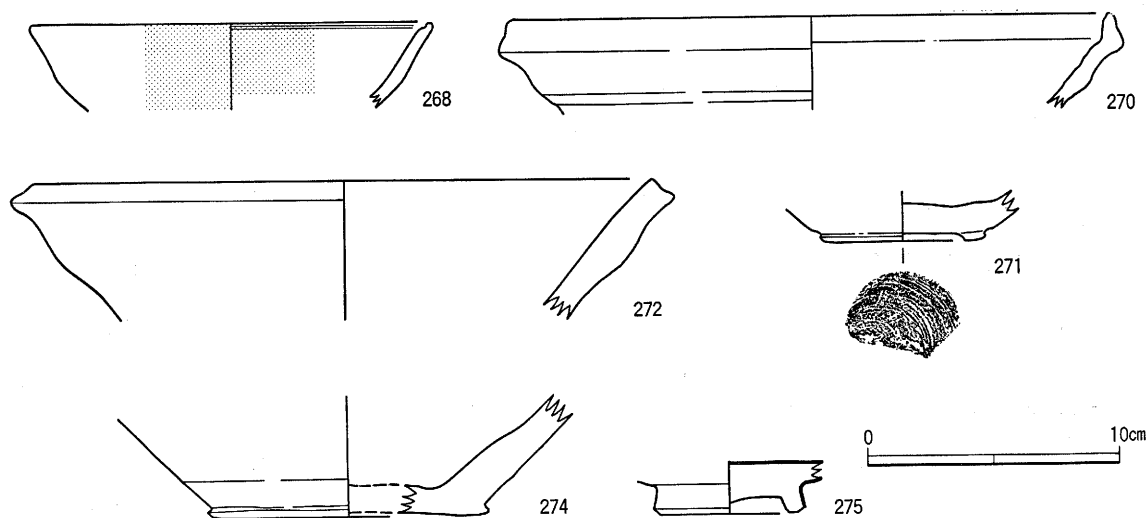
黒色土器 (268) B類の碗である。口縁部内面に沈線をもち、体部内外面ともに丁寧な篭ミガキを施す。胎土に雲母片を含む。

須恵器 (269) 直立する口縁部に端部は丸くおさめる。

須恵器 (270~274) 東播系の捏鉢である。内外面ともに横ナデ調整が施される。重ね焼きの痕跡が



第22図 E区出土遺物実測図



第23図 排土作業中の出土遺物実測図

認められる。274は常滑焼の甕底部である。

山茶碗（271） 高台部は低い台形状をなす。

青磁（275） 削り出し高台で、釉は高台外面まで施される。

第4章 考察

次に遺構・遺物および本遺跡の出現と、周辺遺跡とのかかわりを考えてみたい。

1 遺構の考察

自然流路跡は、①土師器・須恵器の小片（時期不詳）が包含された土層を挟り込んでおり、②瓦器・青磁片を含む中世の堆積層が、E・W区および自然流路を広く覆う。③流路内は中世の堆積層の下より切り込んだ流路が2条認められる。

以上のことから、第Ⅰ期（自然流路Ⅰ）をおおよそ古墳時代後期を含む奈良時代から平安時代とし、第Ⅱ期（自然流路Ⅱ）は瓦器を含まない平安時代後半と考えられる。

第Ⅰ期は、上層に粘土が堆積していることから一端急激な浸食作用をうけ、その後緩やかに堆積したものと考えられる。第Ⅱ期は、第Ⅰ期がほぼ埋没するか、あるいは未だ完全に埋まらず、少しの窪みを残した時点で、再度急激な流れをもったものと考えられる。第Ⅰ期と異なるところは、ほとんど上層近くまで砂・角礫が堆積しており、早い流れの中で急速に堆積したものと考えられる。

本流路跡は、土器・木製品・自然遺物を包含するが、もとよりその来歴性は、明らかではない。しかし北方上流の丘陵裾に営まれた集落が水害などの急激な流れの中で、丘陵部の崩壊に伴い、侵食されたことは容易に推測できる。丘陵部の崩壊は、堆積土の中に角礫が見られることから明らかである。

自然流路の中央に沿い、比高 0.5m の段差が地表面に存在する。1989年の発掘調査例（^{注13}本地点より約150m 下流）でも、段差に重複して自然流路が検出されている。段差は、比高の大小は別として調査地点の北方（上流側）約400m 地点の荒光川から分岐し、南方下流方向約200m の地点荒光谷の出口に至る延長約600m にわたり遺存している。土層観察の結果では明らかに流路が先行し、その上部を覆う中世堆積層を削平することにより段差が形成されている。段差の直接的な原因は、水田の構築に伴い中世堆積層を削平した結果であるが、それだけでは段差と流路の重複関係が曖昧になり、従って水田の構築以前にも多少の段差があり、それに沿って水田面が形成されたと考えるのが妥当であろう。段差の形成と水田の構築が必ずしも同一であるとは限らないが、少なくとも2件の調査例については実証が可能である。いずれにせよ、荒光川に沿った沖積地に中世以降大規模な開墾が行われたことが推察できる。

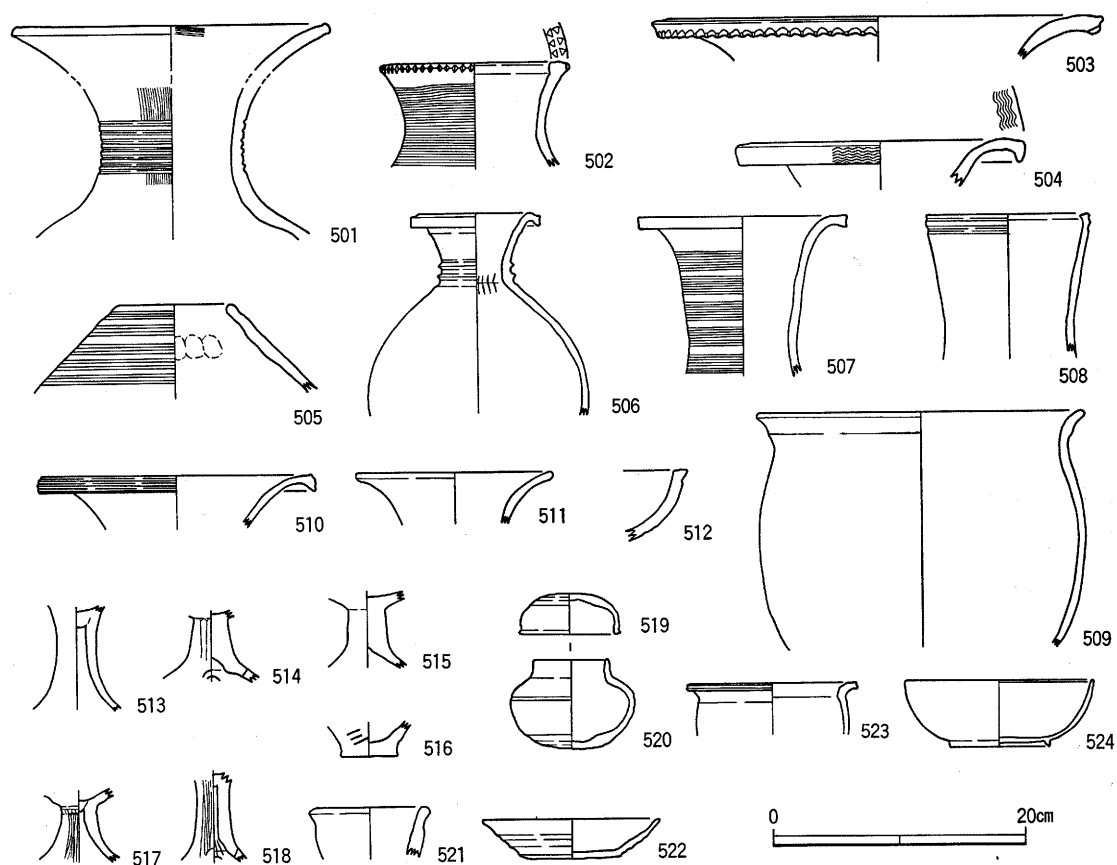
2 遺物の考察

今回出土した土器は、弥生時代中期中葉の特色を持つ壺片を上限とし、中世にかかる中国産磁器・国産陶器類を下限とし、平安時代に比定される土師器・黒色土器（食器類）が割合を占める。ここでは、主として流路の消長にかかわる土師器・黒色土器を取り上げ若干の考察を試みる。

今回の出土遺物の中で最も古い時期に属するのは、弥生時代中期の壺・高杯である。壺は、櫛描直線

文、あるいは凹線文を基調とするもので畿内第ⅢからⅣ様式に比定されるものである。この時期の遺物は、市内では秋津平野の八丁田圃遺跡（第24図501～509）・海岸砂丘の神田遺跡などから出土しているが、稲成地区では丸橋丘遺跡と本遺跡の2例である。後期から庄内式併行期にかけては、高杯が多くほかに壺・甕などがある。この時期、特に庄内式併行期には、紀南地方一斉に、遺物の散布が増加する傾向にあり、他地域とは若干遅れた鉄器の導入が推察される。本遺跡も流路出土という偶然性を伴うにしても、前代より遺物量が増加する。

土師器は、4世紀から11世紀の遺物がある。主なものは、平安時代後期10～11世紀にかかる食器類・甕である。杯・皿・碗の中には、所謂、多段横ナデ^{注14}による特色がみられる。体部外面に強い横ナデが施された土器は、底部から外上方に直線的もしくは内湾気味に立上り、底部を無調整のまま終わるものが多い。この特色をもつ土器は、9世紀後半から11世紀前半を中心に、県下に広くみられる技法で、特に藤並地区遺跡・西国分Ⅱ遺跡・和歌山市の鳴神V遺跡^{注14}に顕著である。近在の例としては、田辺市稲成町の北沖代遺跡（第24図521～524）に類例を見出す。本遺跡では多段横ナデ技法の中でも段が不明瞭なものが多い。11世紀前半代に帰属するものが多い。甕は、長胴形と球形に分かれる。長胴形の体部をもつ甕は、口縁部が体部から大きく外反し、口縁端部を上下に拡張するものが多い。一方球形の体部には、口縁部が短く外反し口縁端部に面を持つものがある。後者の甕は、鳴神V遺跡に類例があり甕



第24図 周辺遺跡出土遺物実測図

八丁田圃遺跡（501～509），丸橋近遺跡（510～515），中ノ段遺跡（516～518），
稲成Ⅱ遺跡（519・520），北中代遺跡（521～524）

の分類からⅢ類に該当し、10世紀後半から11世紀にかけてのものである。土師器の杯あるいは甕の胎土に有田川から紀ノ川にかけての結晶片岩を含み、特に甕は半数近くが胎土に結晶片岩を含んでいる。また、特異な例として杯（190）には、祭祀的な意味合いをもつものであるうか、底部穿孔を行ったものがある。藤並地区遺跡大溝にも同様の遺物が出土している。

黒色土器は、碗のみで大半がA類である。口縁部外面を横ナデあるいは横ナデの後篋ミガキを加えるものがあり、体部外面にも同様のことがいえる。体部外面に明瞭な多段横ナデを施すものと、やや曖昧になったもの、段が認められないものなどがある。器壁には厚薄があり、総体的に器壁の薄い方が体部内面に篋ミガキを加える。これらの特色は、鳴神V遺跡あるいは、北沖代遺跡に比較検討すれば、明瞭な多段横無で技法をもち内面に粗い篋磨きを施す一群は、10世紀後半に比定でき、段が不明瞭もしくは認められないものは、11世紀前半に位置付けることができる。また、下位出土の黒色土器が、相対的には古い要素をもっているとみられる。

以上、流路出土の最も新しい土師器（食器類）・黒色土器は、その特徴から10世紀代ないし11世紀前半頃の時期が与えられる。従って自然流路の終焉も11世紀前半頃と推定できる。

3 稲成遺跡の出現と周辺遺跡（第2・24図）

今回出土した遺物の中で、最も古く遡るのは弥生時代中期の土器である。これらの遺物は少量ながらも、上流側に位置した集落遺跡の上限の一点を示唆するものである。ここでは、弥生時代に焦点をしばらく稲成遺跡の出現と稲成地区の遺跡の現状を少し考えてみたい。

現在稲成地区には弥生時代の散布地が^{注16}15箇所（第2図1・2・5・6・9・10・12～16他）に分布している。いずれも未調査のため、詳細が不明であることを前提とするが、中期から始まる遺跡は本遺跡を含め2箇所、後期から庄内式併行期にかけては小規模な散布地が13箇所確認されている。それぞれの遺跡は、沖積地を避け標高50m前後の丘陵上から裾部にかけて立地している。その後古墳時代には散布地が5箇所（4・23他）に減少し、古墳は3箇所（17・22他）に築造される。

以上のように稲成地区の弥生時代遺跡の分布をみれば、中期を初現とする遺跡は、本遺跡と他に丸橋丘遺跡がある。丸橋丘遺跡（第2図2・3）は、本遺跡から北へ約650mのところ、丘陵と裾部に跨り、柱状石斧および凹線文（510）を施す壺と高杯（512）などが出土し、庄内式併行期（513～515）まで継続するものである。凹線文を主体とした畿内第Ⅳ様式にその上限が求められる。本遺跡の方は、細片ながらも櫛描直線文が施された土器がみられ、前者に先行する可能性が考えられる。このようにみると、稲成遺跡の出現は稲成地区では初現的なものであり丸橋丘遺跡に先行する可能性をもち、かつ丸橋丘遺跡が弥生時代終末期に廃絶するのに比べ、稲成遺跡は古墳時代以降も継続した遺跡であったと理解できる。加えて、これら中期の遺跡は、ともに荒光川流域を生活立地の基盤としていたと考えられる。

本遺跡より丘陵を挟み東方約1.3kmに八丁田圃遺跡が所在する。この遺跡は、自然堤防上の遺跡で縄文晩期終末・弥生時代前期新段階および中期の遺物（501～509）、土坑・溝状遺構および自然流路跡が検出されている。秋津平野周辺の母村的性格をもち、現在のところ中期中葉をもって廃絶したと考えられる。この頃から新たに矢矧遺跡（第2図28）など数箇所^{注17}に遺跡が出現してくる。このことは、八丁田圃遺跡からの分村とも受け取れるが、自然流路跡に示されているように、水害などの災害による集落

移動とも考えられる。中期の遺跡がすべて沖積地を避け丘陵の裾部に占地するのは、上記の原因を示唆するものではないか。また、それらが周辺へ分散進出していく過程の中で、一集団が荒光川流域にも及んだのではないかと推察する。

後期以降終末期にかけては、稲成川流域を中心として散布地の急激な増加がみられ、比高100mを越える山頂（第2図15）にまで進出する。古墳時代にはいるとそれまで増加の傾向にあった散布地が、減少の一途をたどり、後期古墳も3基ほどが築造されるにとどまる。急激な遺跡の増加は、ほかの地方と同様、鉄器の普及に一因が求められるものであり、また山頂の遺跡は、通常的生活基盤から隔絶しており、3世紀後半西日本を大きく席卷した倭国乱に関係した高地性集落としての性格を与えうるものである。従って、一時の昂揚期は、動乱という激変期を経て、次の古墳時代には、衰退期を向かえるものと考えられる。このことは、後期に銅鐸の埋納が盛んに行われ、遺跡の著しい増加が見られる紀南地方一般と共通する現象である。

第5章 総 括

発掘調査の成果と若干の考察を述べてみた。あらためて次に周辺遺跡の関連も含め要点を列記する。

1 稲成遺跡は、集落遺跡近辺に流れをもった自然流路跡に残された弥生時代畿内第Ⅲ様式から平安時代後期11世紀前半の土器・木製品を出土する。これらの遺物は、集落で使用あるいは廃棄された土器や木製品の一部分が、水害などの急激な土石流により押し流され堆積したのと考えられる。堆積の時期は、大きく分ければ二期が想定され、出土遺物の観点から最終の埋没は11世紀前半と考えられる。

2 流失した自然流路の遺物が響一遺跡か複数遺跡の遺物を含んでいるかは明らかではないが、その遺跡は調査地点の上流側に位置することは明らかである。

3 土層観察の結果、中世の包含層を削平し山土・砂岩を混入した床土を伴う耕作土がみられる。このことは調査地点での水田経営は比較的新しく、中世後半ないし近世にかかるものと考えられる。この水田構築時に生じたと考えられる段差は、延長600mにも達し開墾の規模の大きさをうかがわせる。

4 1989年の調査例^{註13}を援用すれば、集落遺跡の性格は農村的要素をもち、人形の出土にみられるように、都に広く流布していた呪術が、地方の農村集落においても行われていたことが伺える。

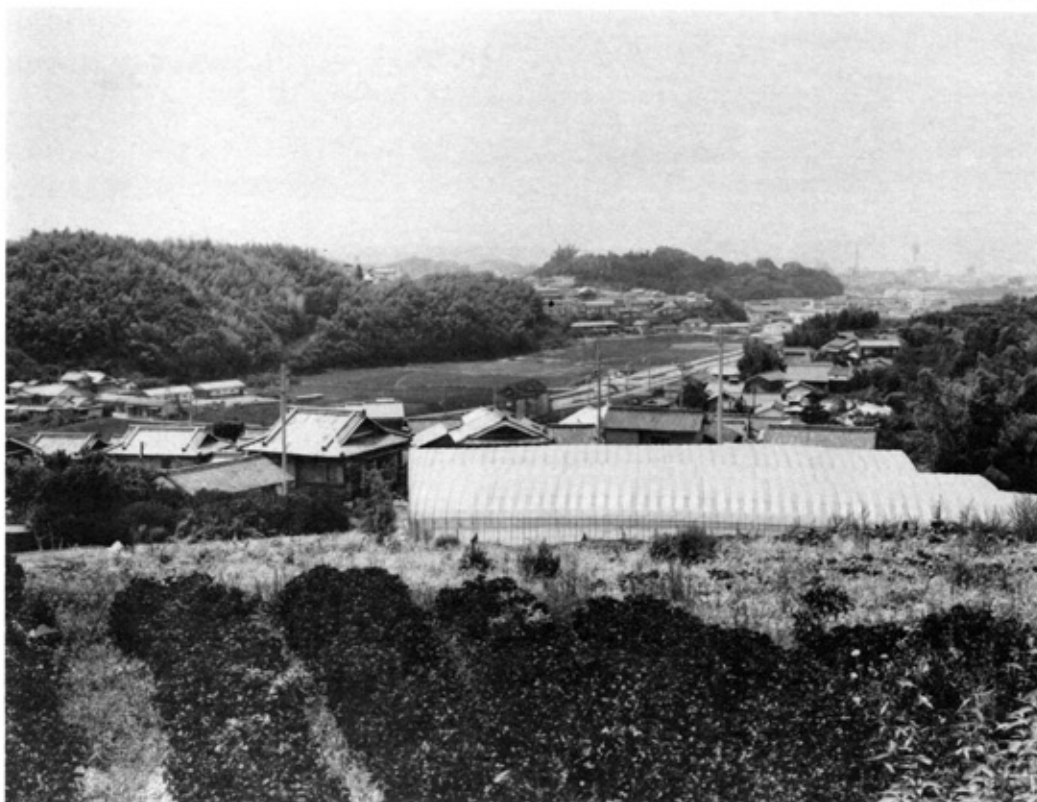
5 出土遺物は、弥生土器・土師器・黒色土器・須恵器・製塩土器・布目瓦・瓦器・青磁・管状土錘・曲物・木錘・板状木製品などである。これらの遺物から、丸橋丘遺跡のならば稲成地区最古の弥生時代集落が推定され、平安時代後期隣村集落ともいえる北沖代遺跡と同時期の遺物を出土する。また、平安時代土師器の甕・杯の一部は、結晶片岩を胎土に含み紀北からの搬入品であることを示唆する。

今回の調査で検出した自然流路跡はごく限られた一部の調査であった。しかしながら出土遺物は、土器類にとどまらず木製品をも資料に加えることができた。これらの遺物は、稲成川流域の集落研究に貴重な資料を提供したものと見える。したがって自然流路の大部分を占める未掘調査部分に未だ数多くの貴重な資料が遺存している可能性が高く、加えて、上流に存在する集落遺跡の確認作業など、今後に持ち越された課題は大きく、より詳細な調査研究が待たれるのである。

〔註・参考文献〕

- 註1 和歌山県「和名類聚鈔（抄）」（『和歌山県史』古代史料二）昭和56年
- 註2 新訂増補国史大系『日本書紀』
- 註3 日本古典文学大系『万葉集』
- 註4 「いほぬし」（『群書類従』）
- 註5 和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』平成元年
- 註6 浦宏「紀伊国高山寺貝塚発掘調査報告」（『考古学』9—7）昭和13年他
- 註7 田辺市教育委員会「八丁田圃遺跡発掘調査概報」（『田辺文化財26』）昭和58年
- 註8 「和歌山県瀬戸遺跡の試掘調査」（『京都大学構内遺跡調査研究年報』）京都大学埋蔵文化財研究センター 昭和54年度
- 註9 堅田直・田辺市教育委員会「磯間岩陰遺跡調査概報」（『田辺文化財15』）昭和47年
- 註10 近藤義郎・田辺市教育委員会「古日良遺跡発掘調査概報」（『田辺文化財8』）昭和39年
- 註11 堅田直・田辺市教育委員会「三栖廃寺発掘調査概報」（『田辺文化財23』）昭和55年他
- 註12 奈良国立文化財研究所『木器集成図録』（近畿古代篇）昭和60年
- 註13 田辺市稲成町荒光地区土地改良事業（組合）に伴う調査・（財）和歌山県文化財センター 平成元年
- 註14 和歌山県教育委員会『鳴神地区遺跡発掘調査報告書』昭和59年
- 註15 和歌山県教育委員会『野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書』昭和60年
- 註16 浦宏「稲成谷を繞る山腹丘陵の弥生式遺跡について」（『紀伊考古』2—4）昭和14年
- 註17 和歌山県「矢矧遺跡」（『和歌山県史』考古資料）昭和58年

版 圖



1 稲成遺跡遠景（北から）



2 自然流路中位上面（北東から）



1 自然流路内流木出土状況（北東から）



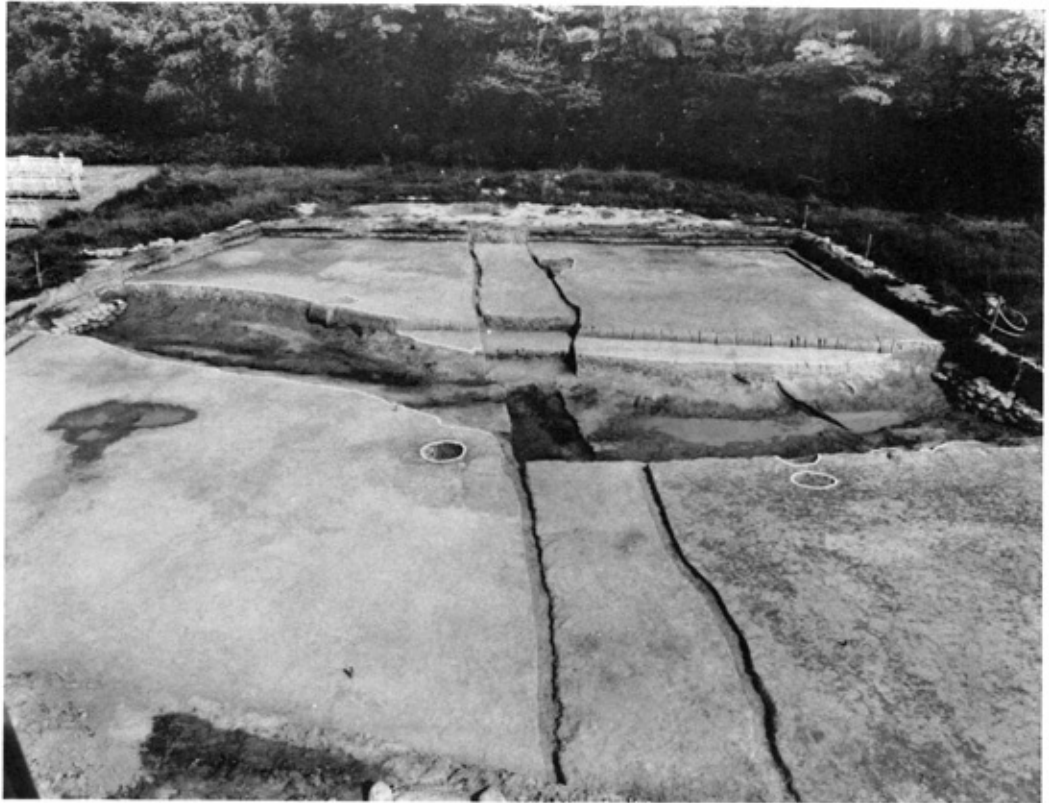
2 自然流路跡検出状況（北東から）



1 自然流路跡検出状況（南西から）



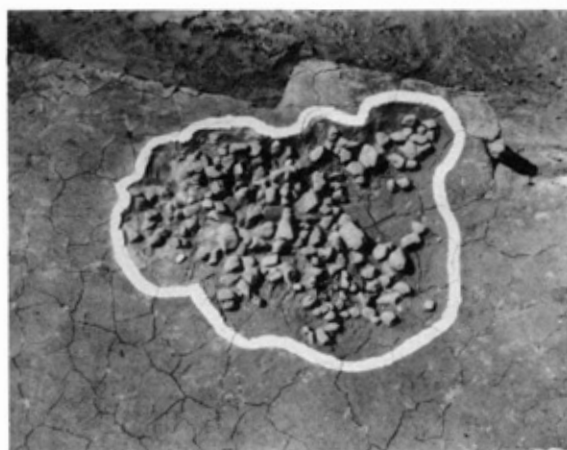
2 自然流路跡と上流側遠景（南西から）



1 調査区全景（西から）



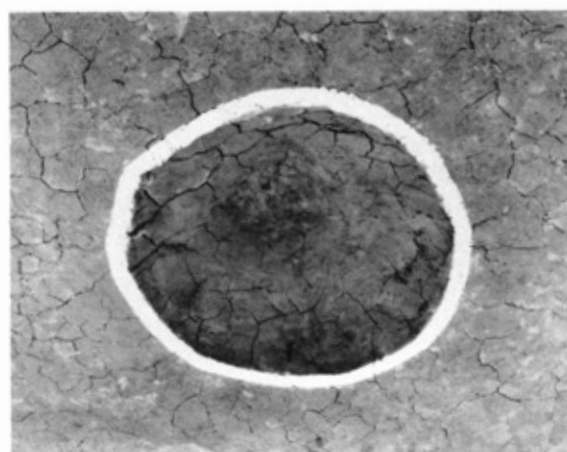
2 自然流路南端土層（北から）



1 遺構1 砂岩礫出土状況 (南から)



2 遺構1 (南から)



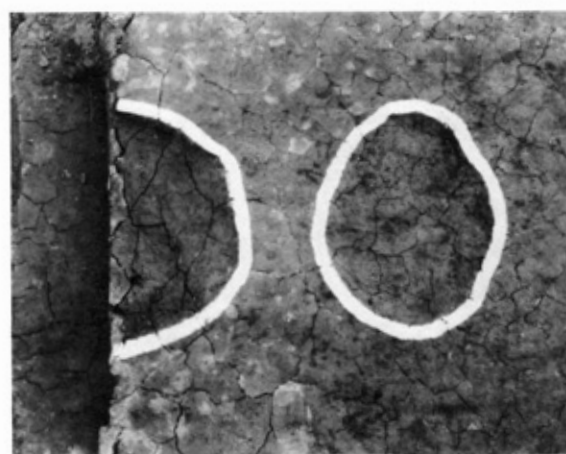
3 遺構2 (北から)



4 遺構3 (南東から)



5 遺構4 (南から)



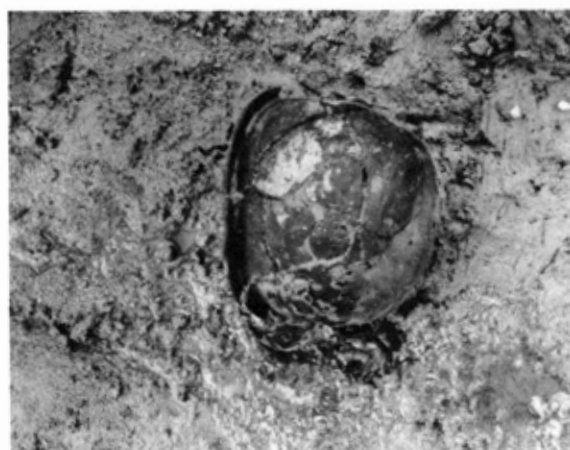
6 遺構5 (左)・遺構6 (右)



1 自然流路内出土遺物・土師器



2 自然流路内出土遺物・土師器



3 自然流路内出土遺物・土師器



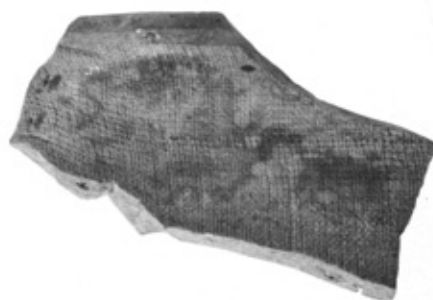
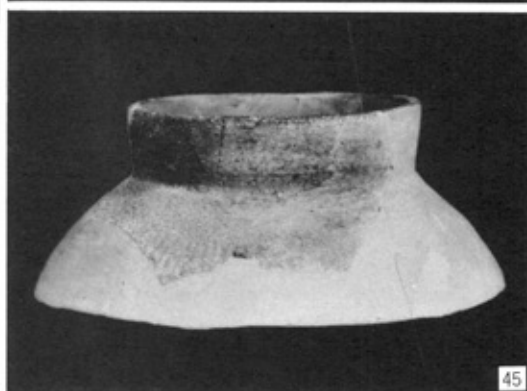
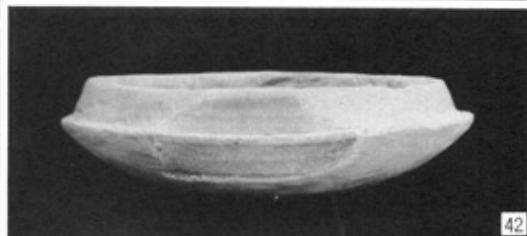
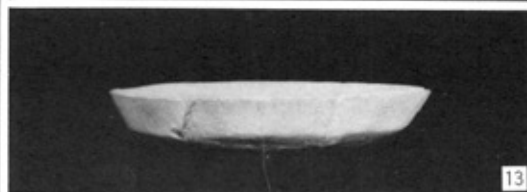
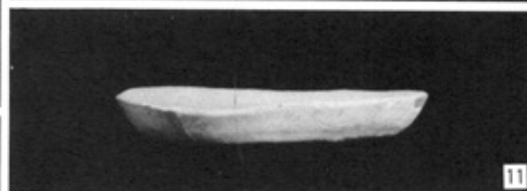
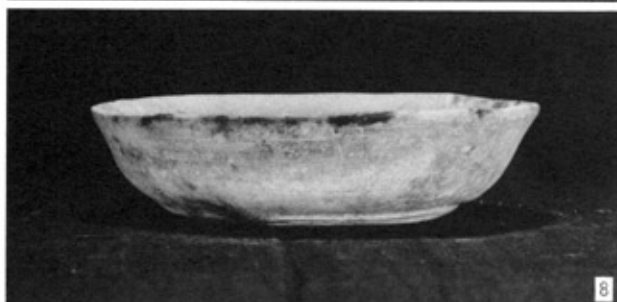
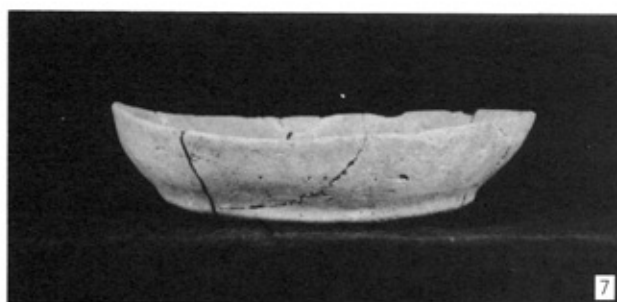
4 自然流路内出土遺物・土師器

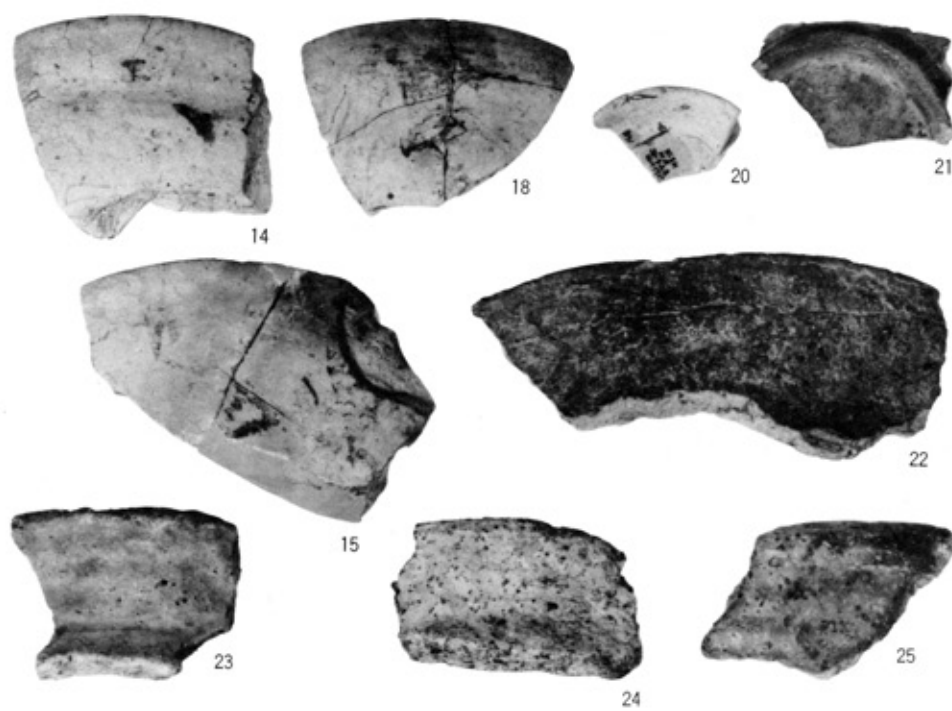
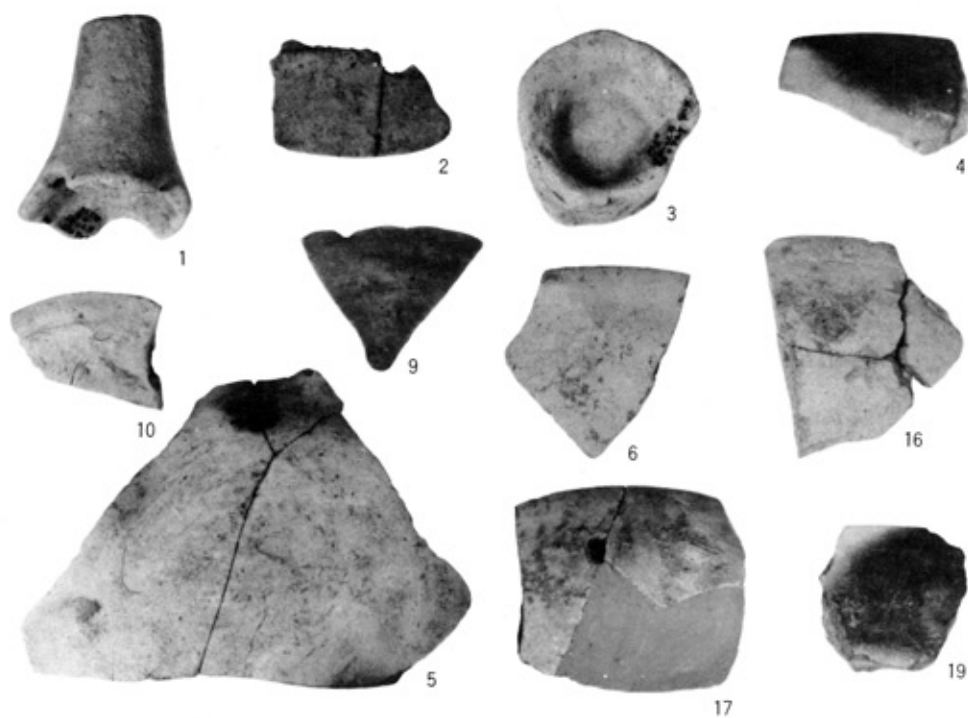


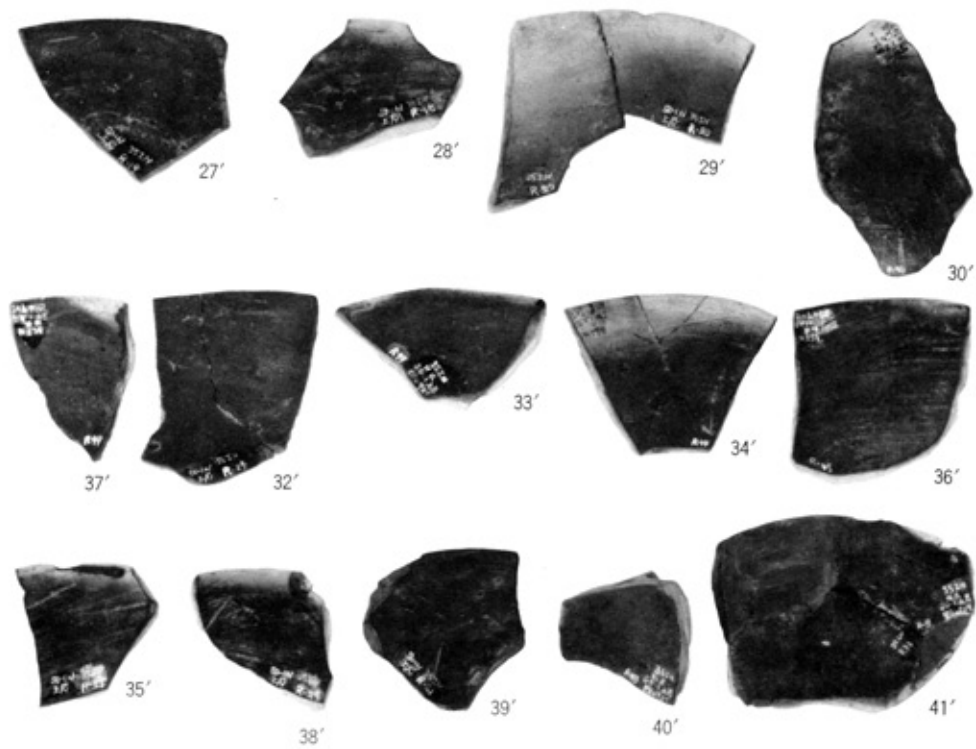
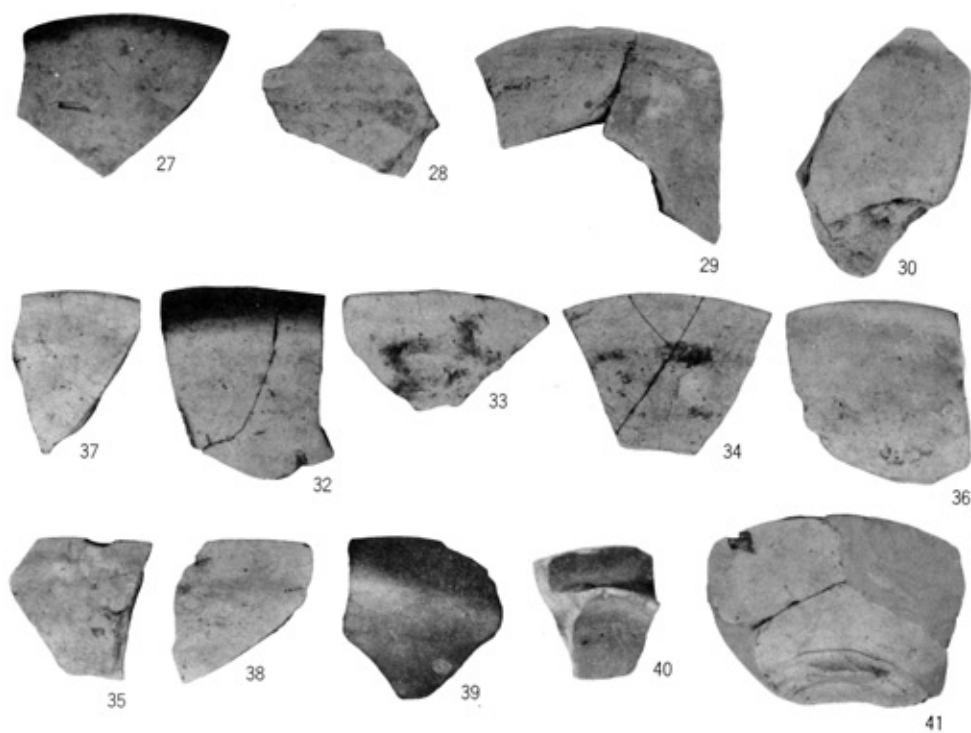
5 自然流路内出土遺物・木製品

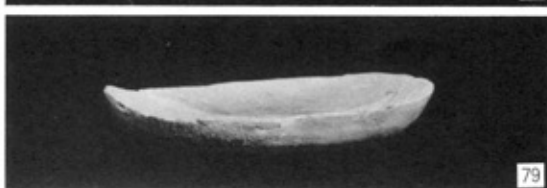
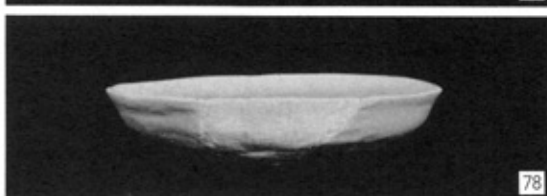
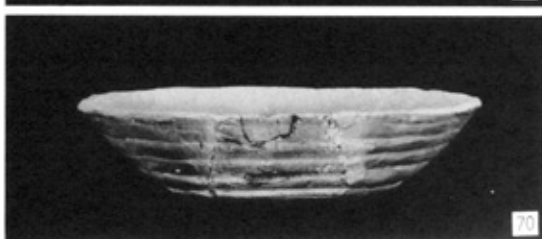
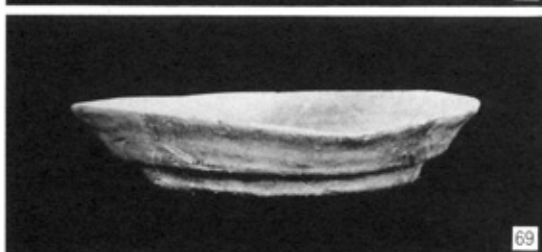
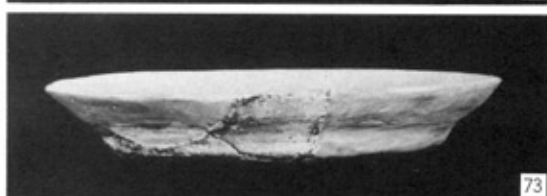
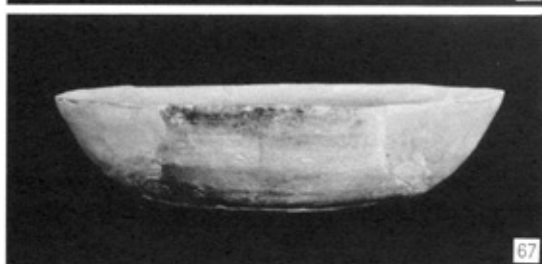
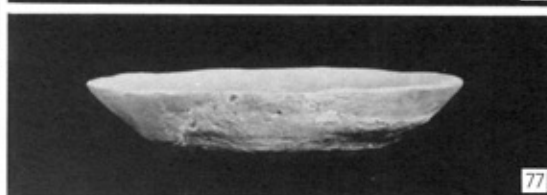
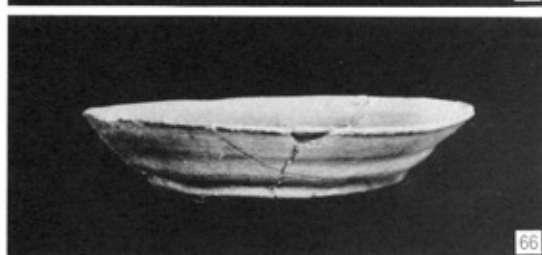
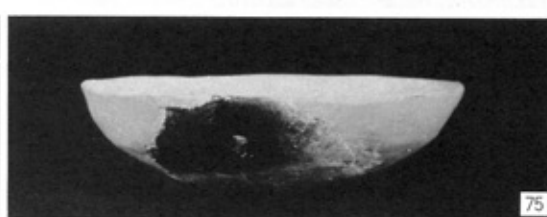
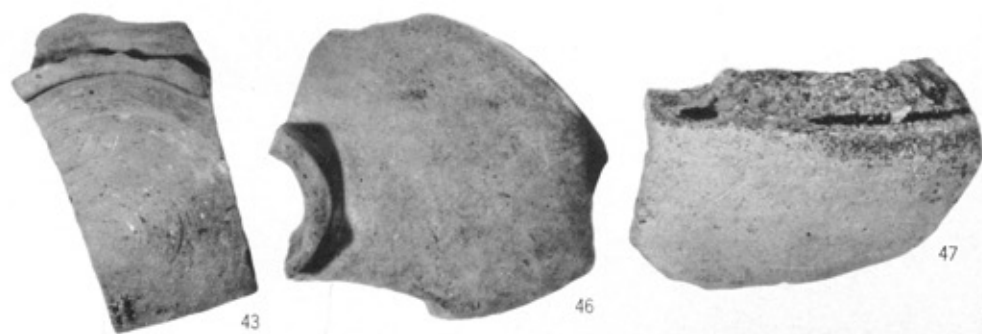


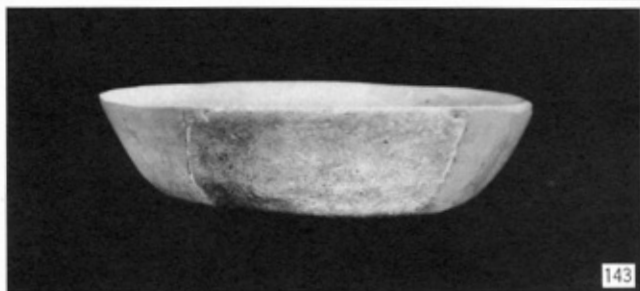
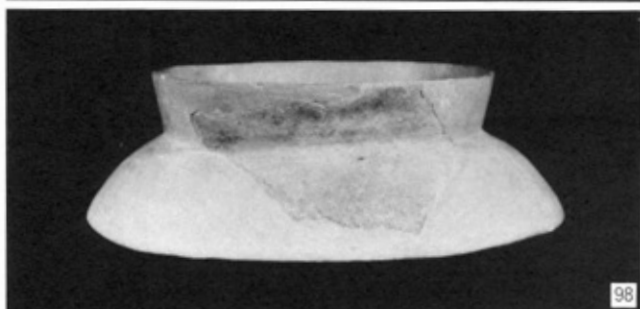
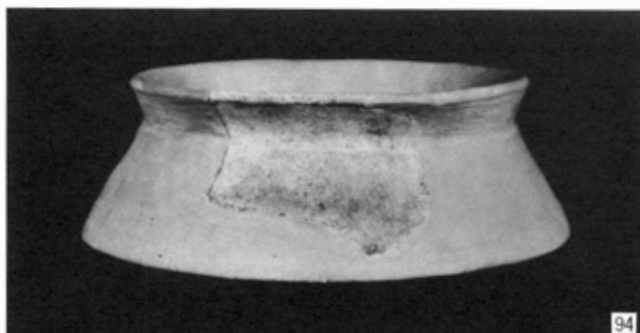
6 自然流路内出土遺物・自然遺物

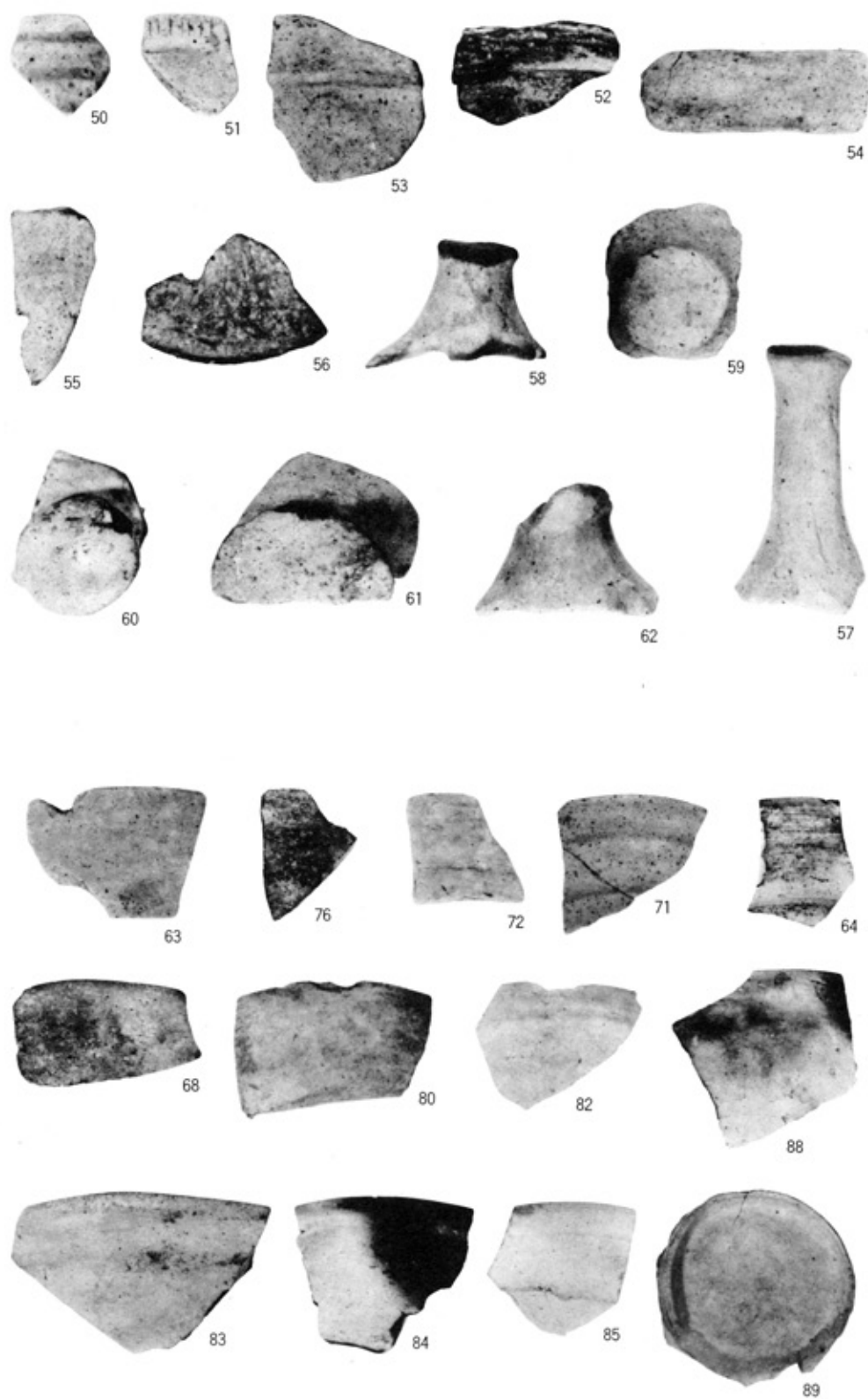


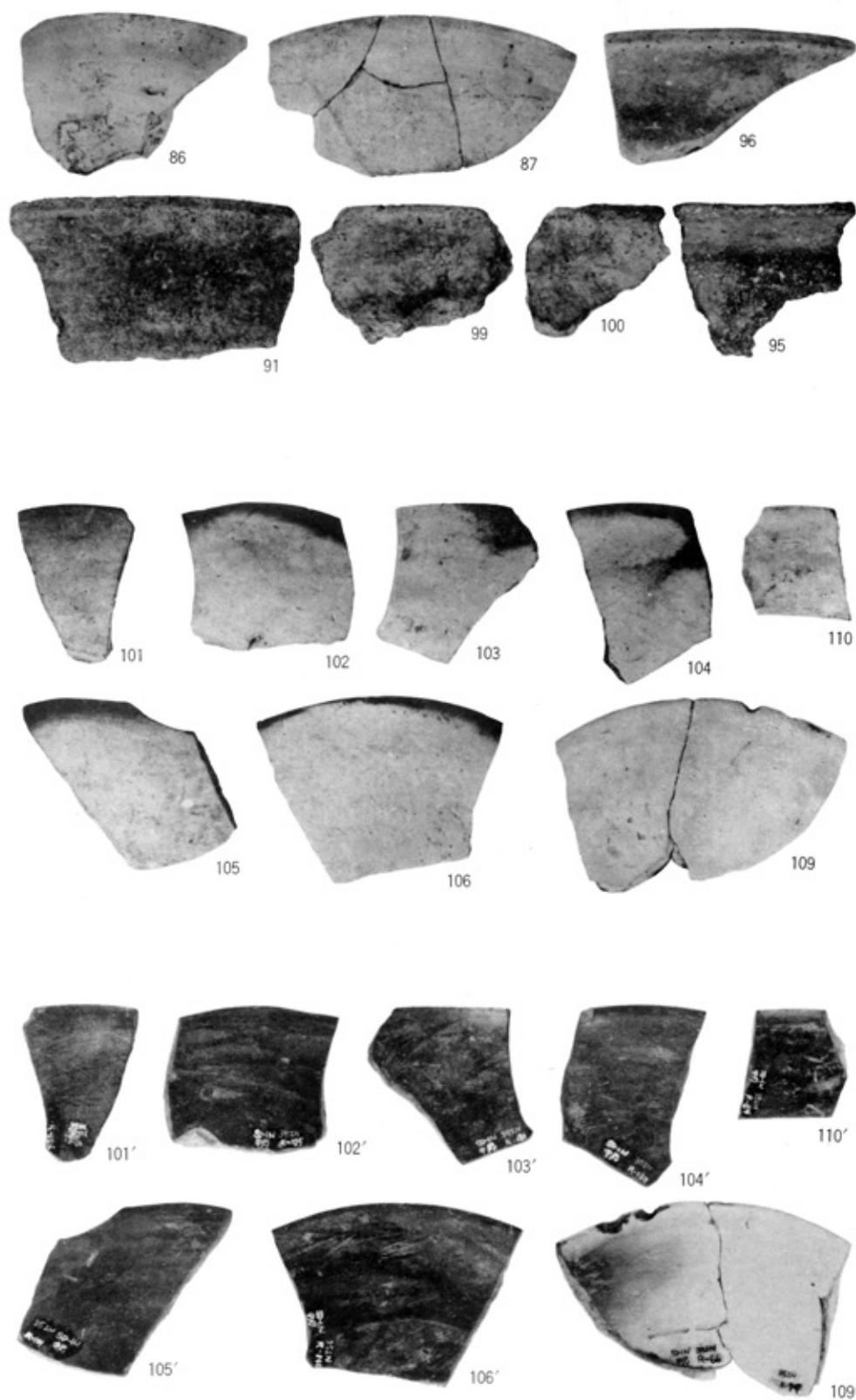


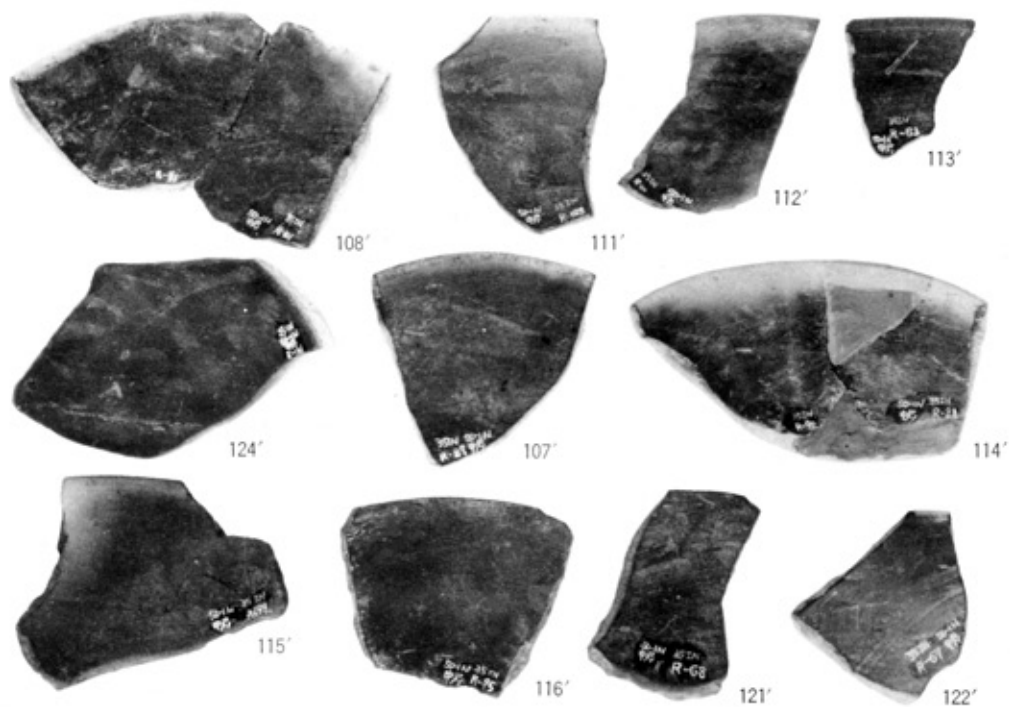
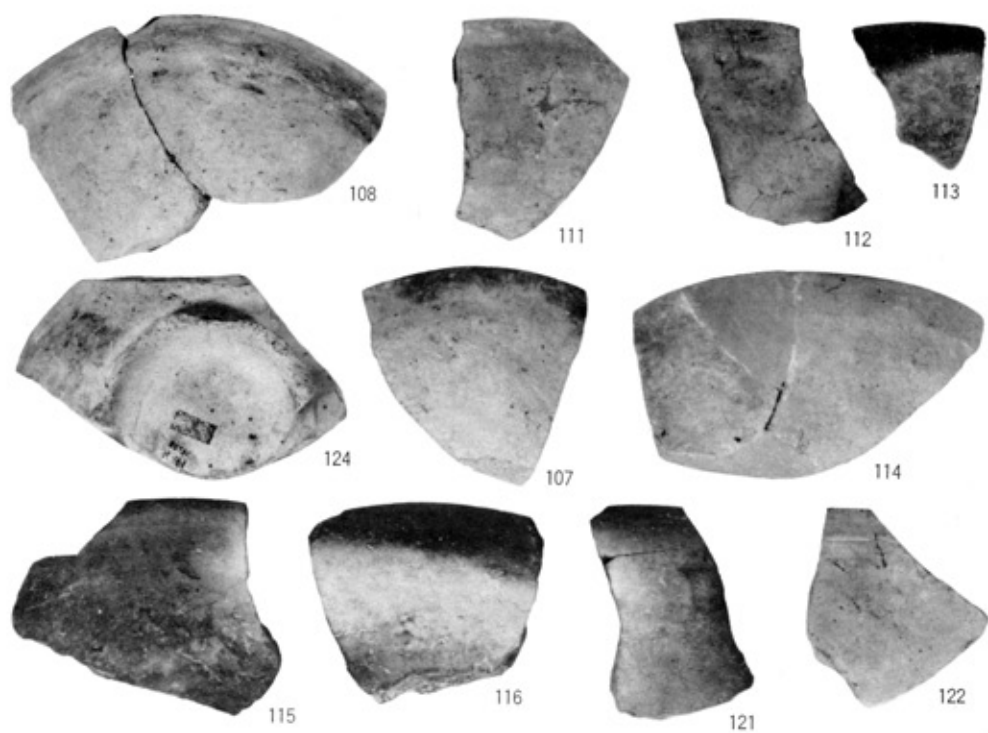


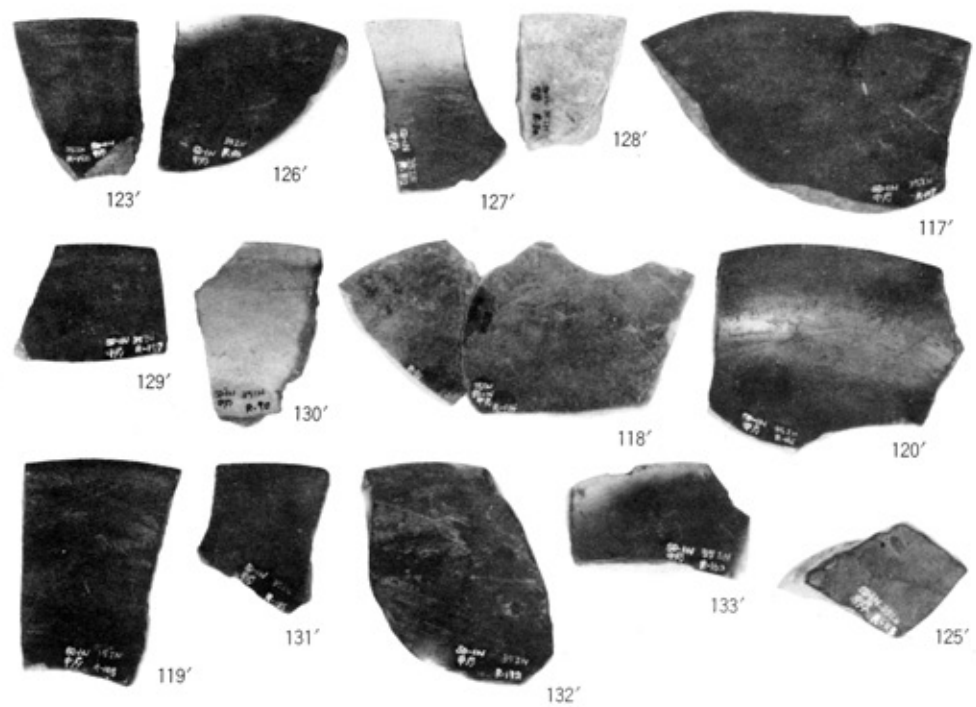
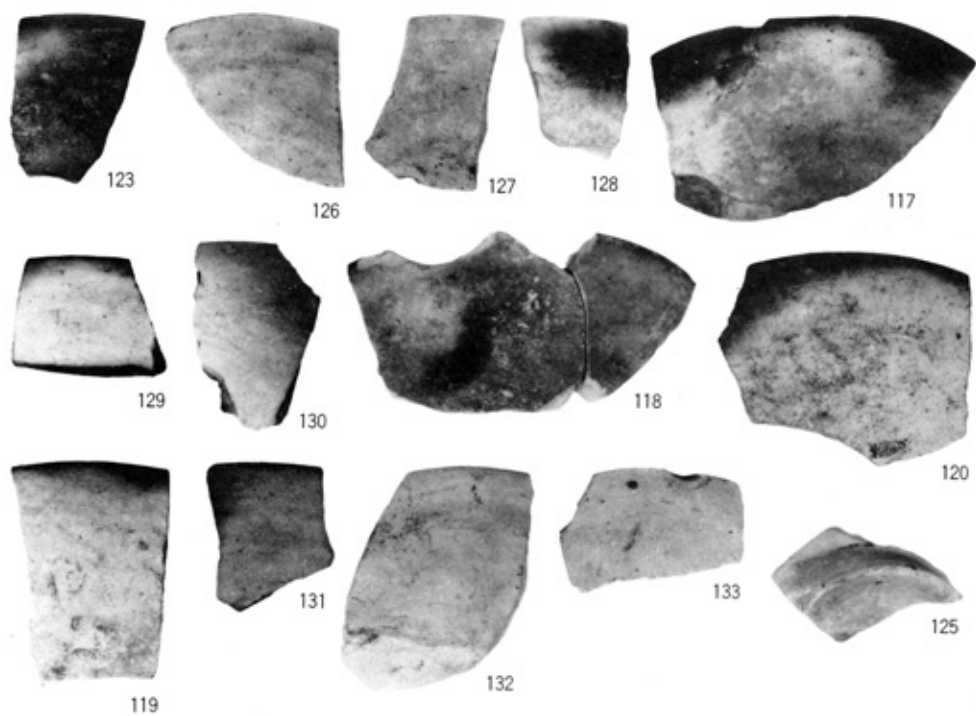














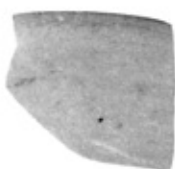
139



140



141



142



146



148



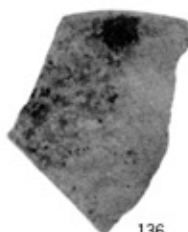
145



147



135



136



137



138



150



154



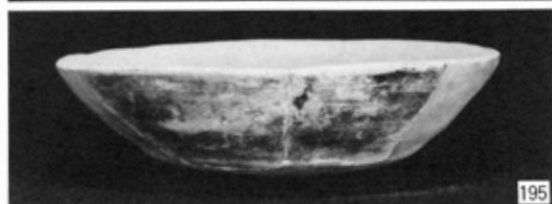
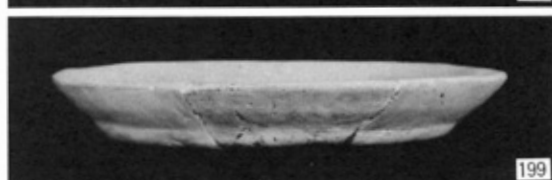
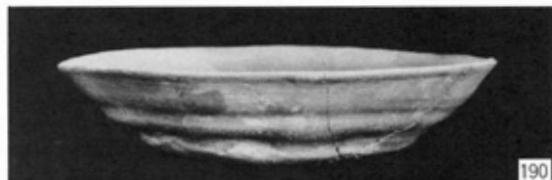
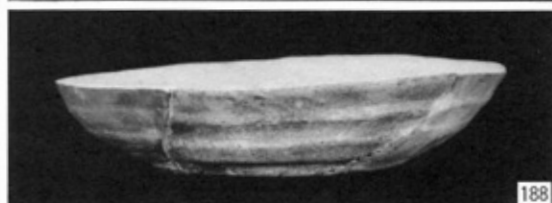
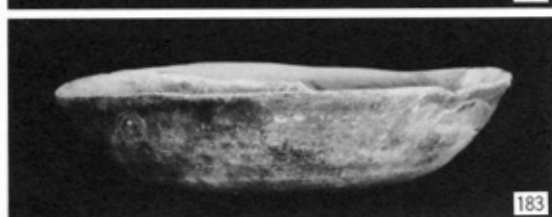
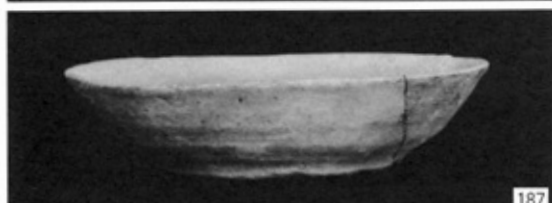
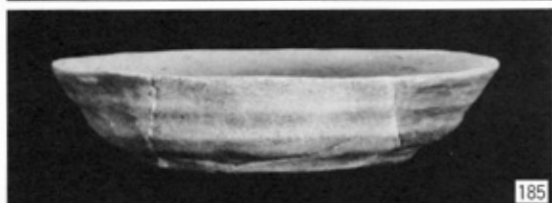
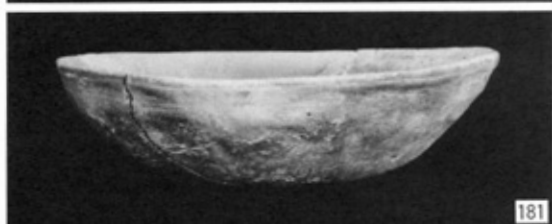
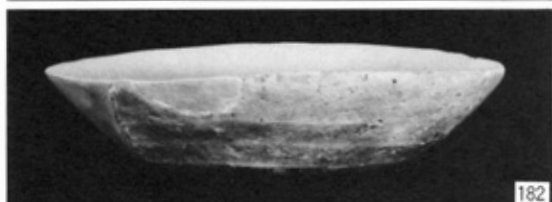
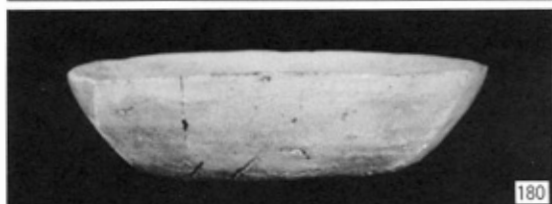
152

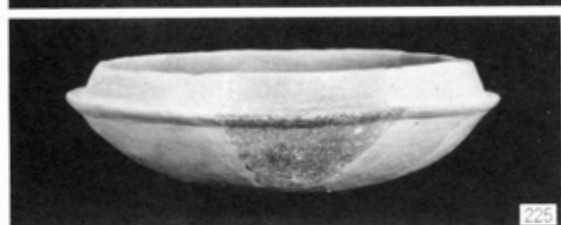
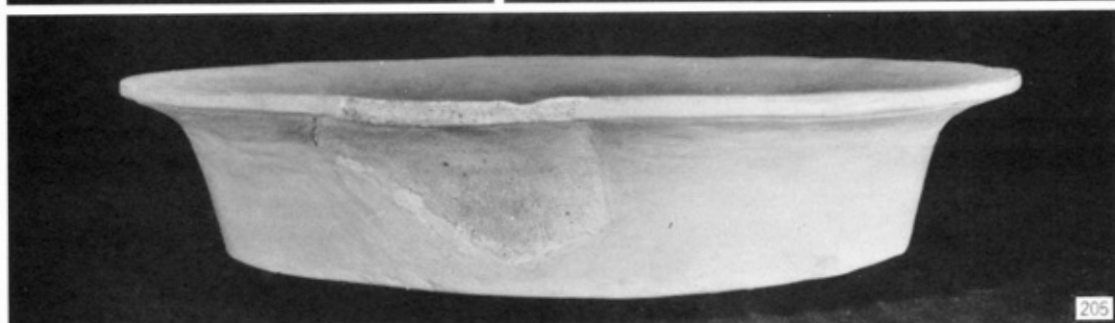
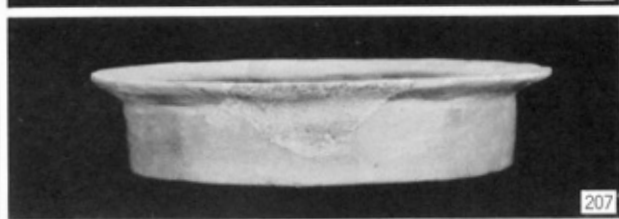
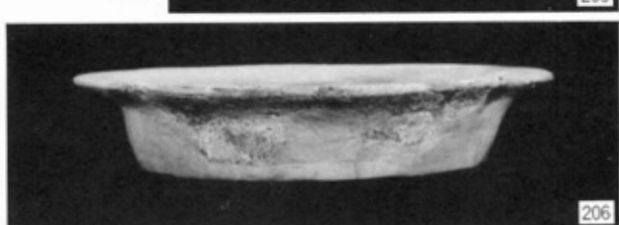
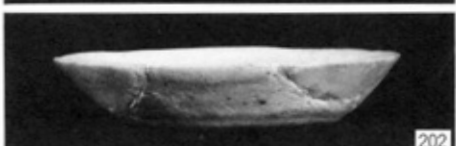
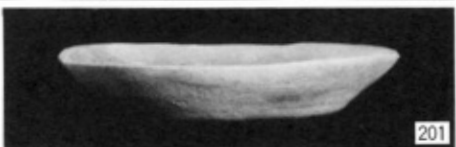
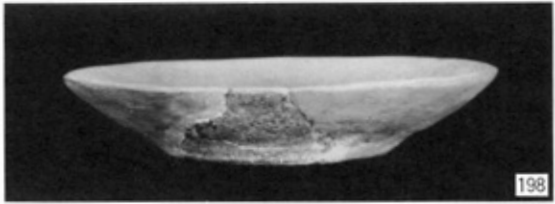


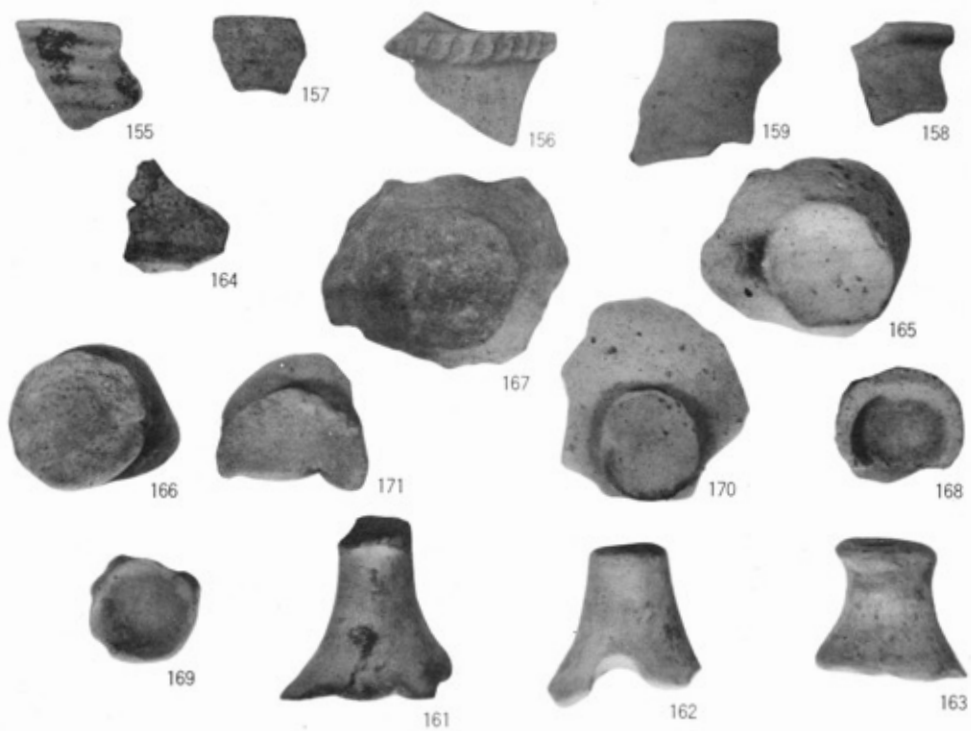
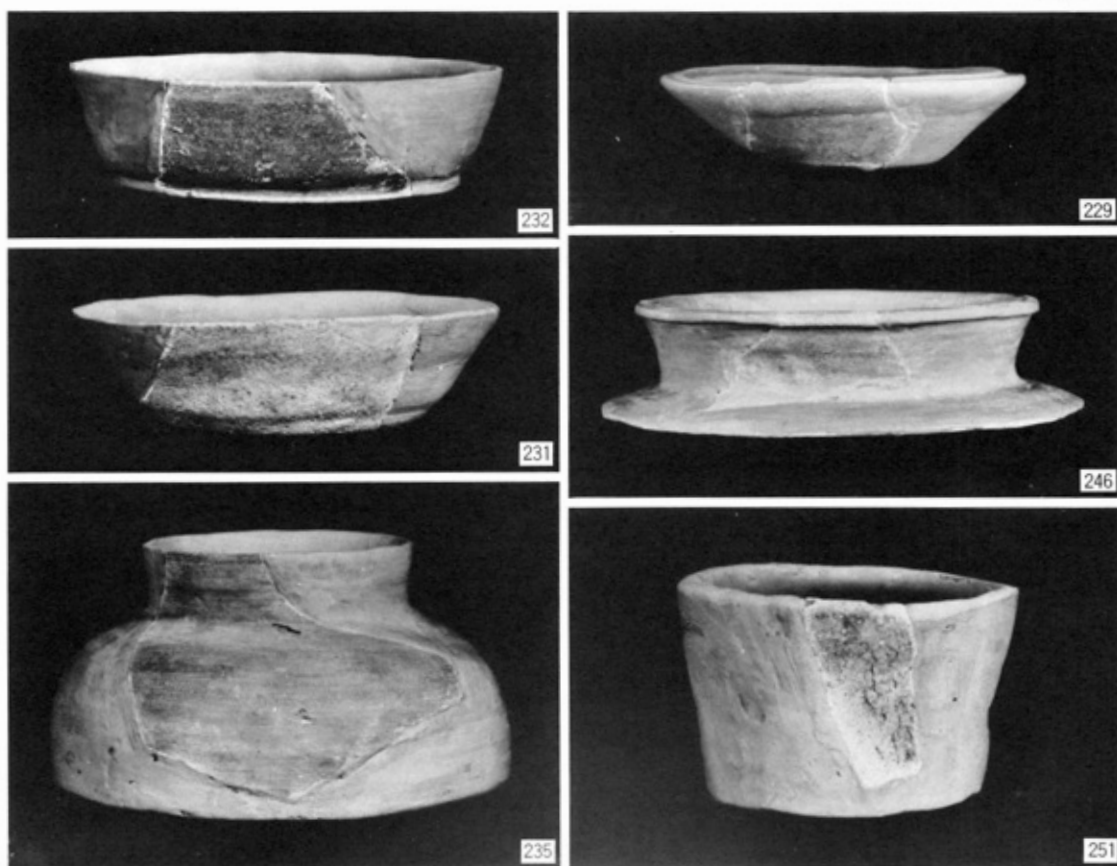
149

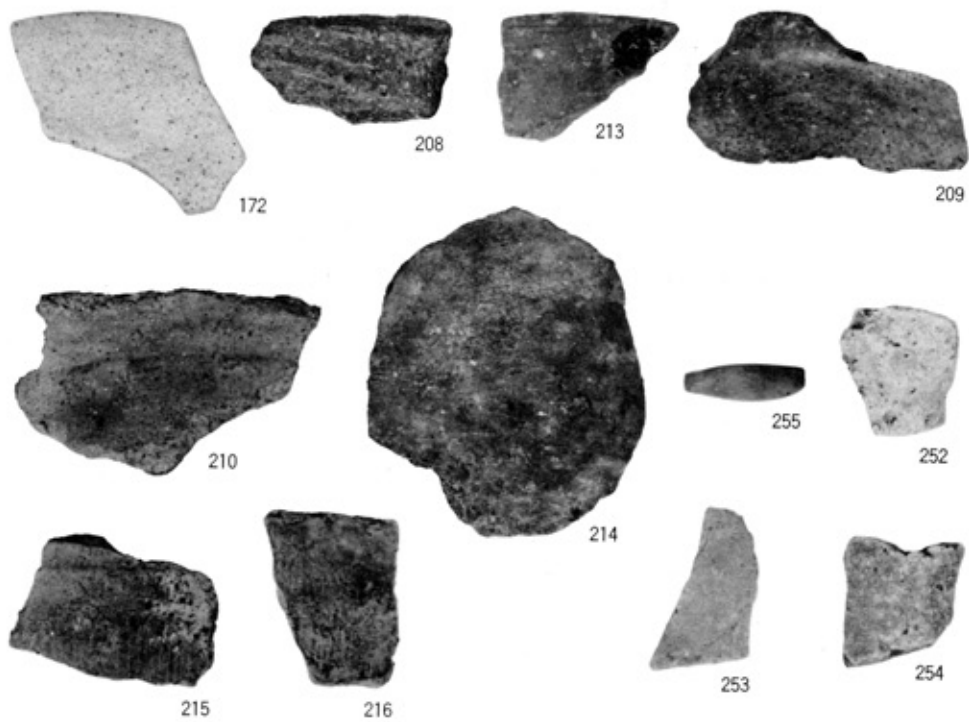
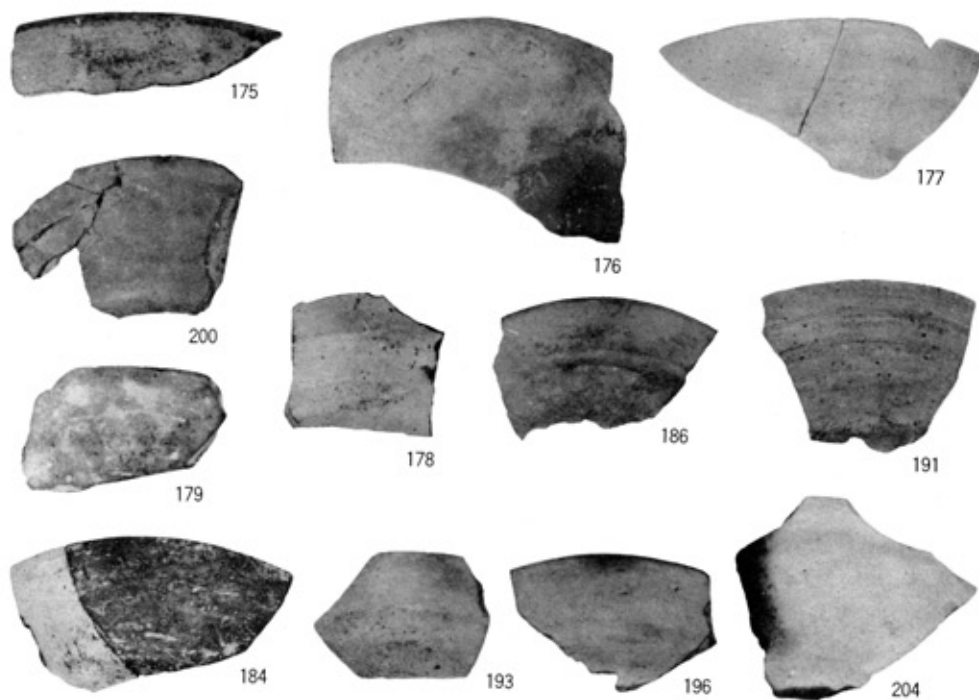


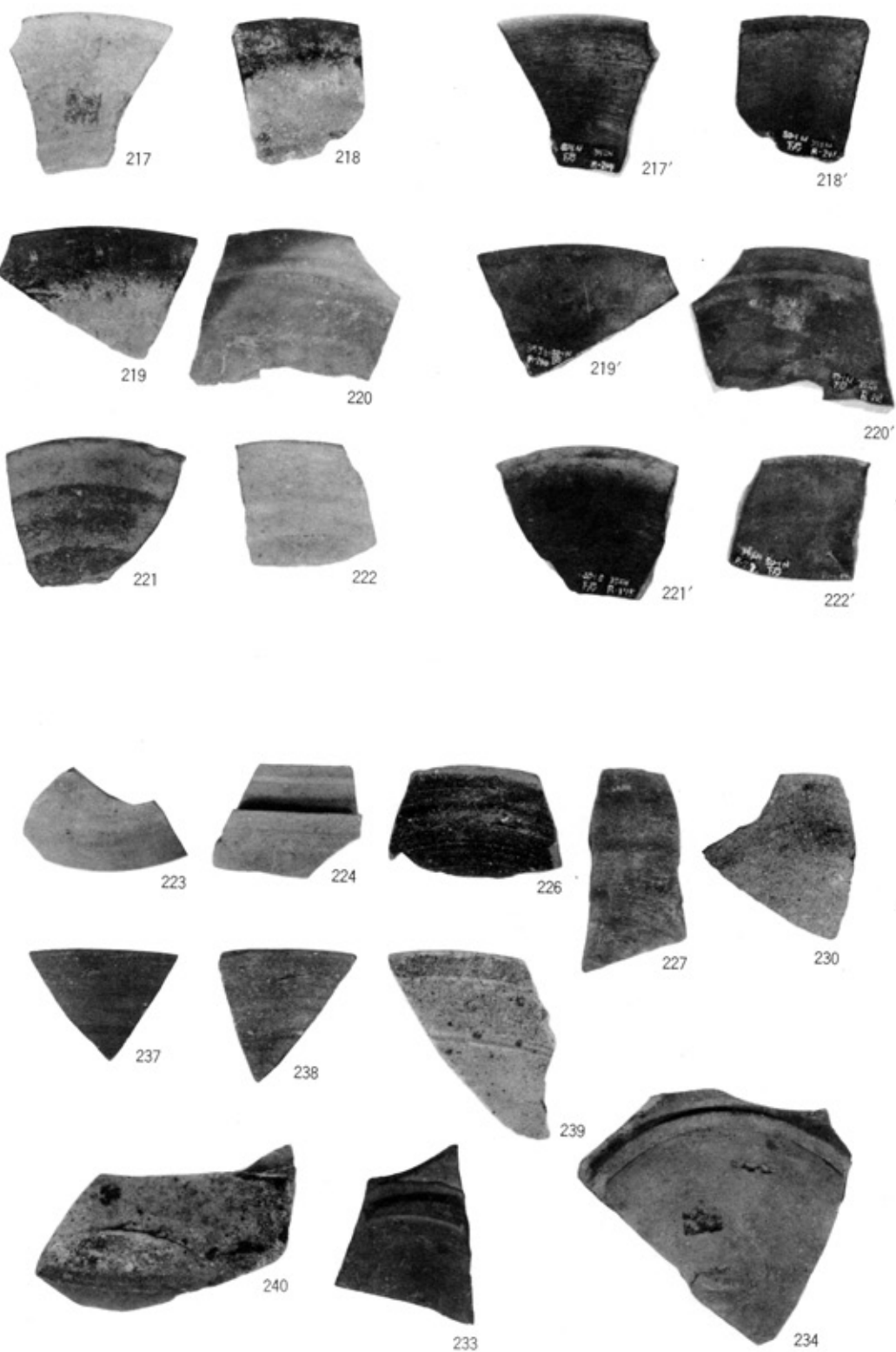
151

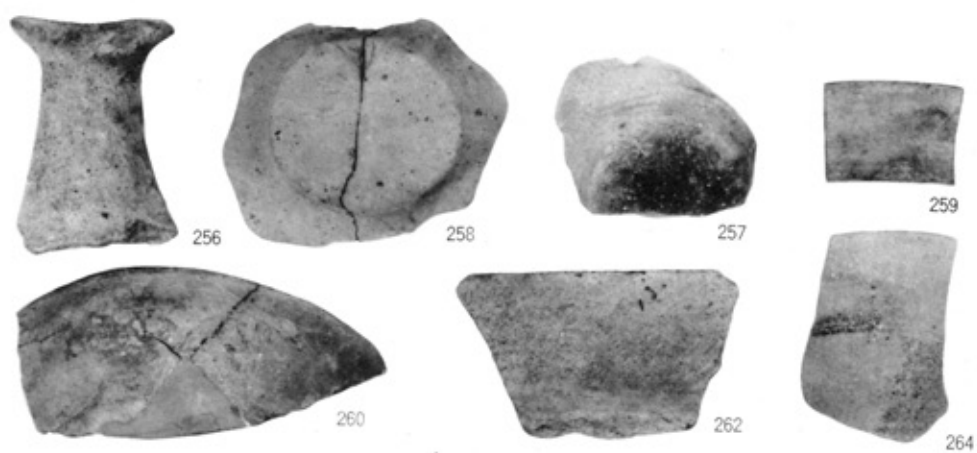
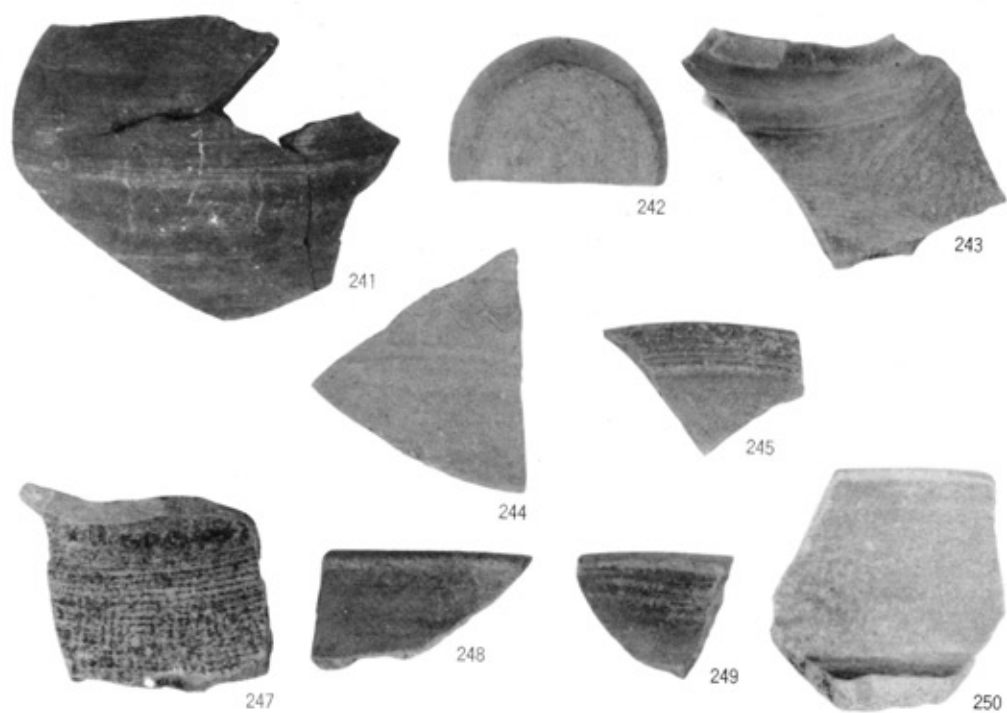


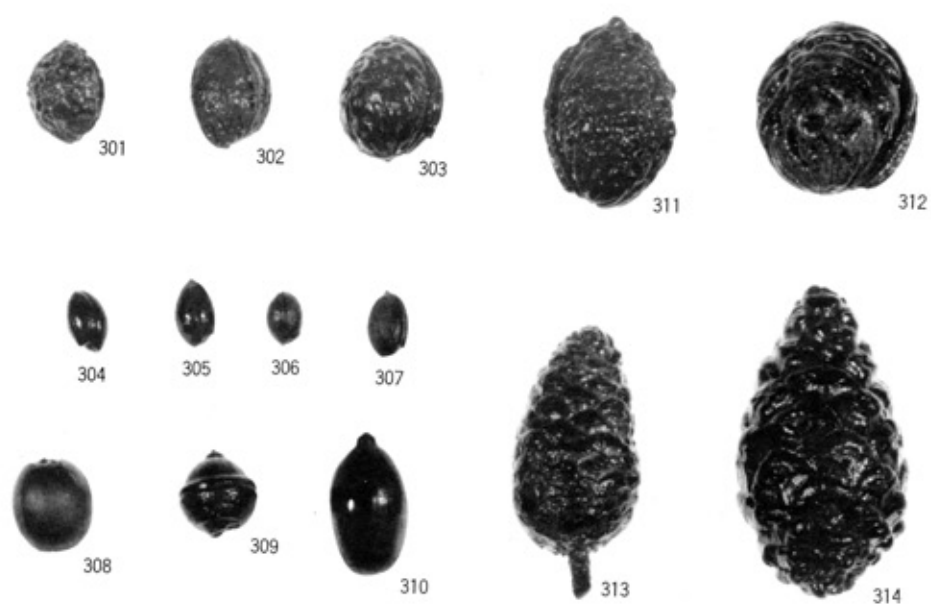
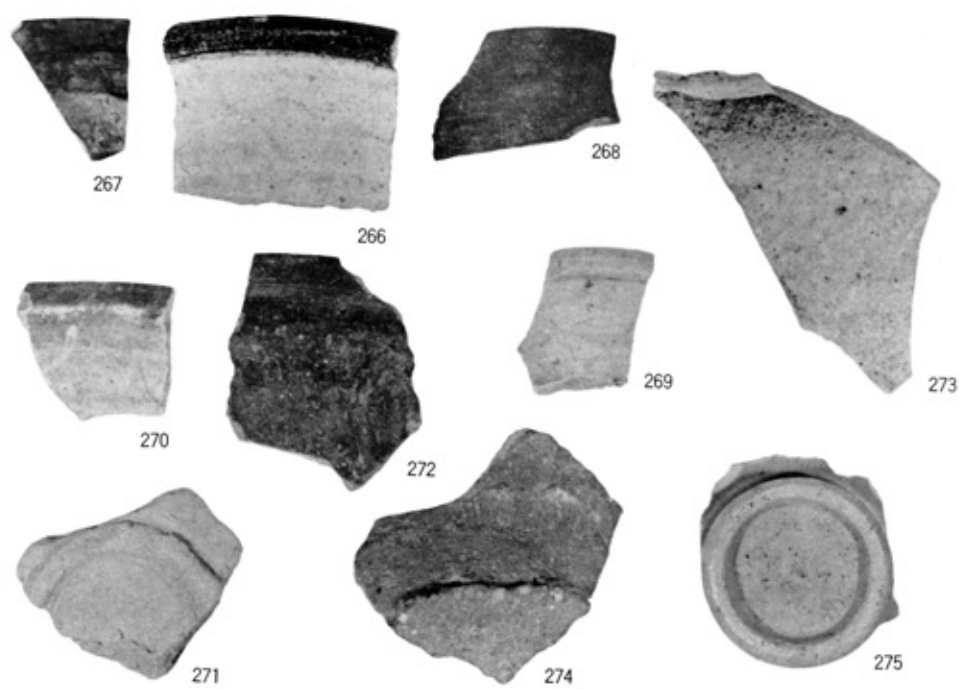














W3



W2



W4

W5

W10



W7



W9

W6



W8



W12

稲 成 遺 跡

——般国道42号（田辺バイパス）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——

1990年3月発行

編集
発行

財団法人和歌山県文化財センター

印刷

有限会社 真 陽 社
